

四国横断自動車道建設に伴う

# 埋蔵文化財発掘調査概報

平成 9 年度

1998. 3

香川県埋蔵文化財研究会

## 例 言

1. 本書は、四国横断自動車道建設に伴い、平成9年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の概要を記録したものである。
2. 本調査は、香川県教育委員会が調査主体となり、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターを調査担当者として実施した。
3. 本年度の調査組織は、以下のとおりである。

総括	所長	大森 忠彦			
	次長	小野 善範			
総務	参事	別枝 義昭			
	副主幹	田中 秀文 (平成9年6月1日から)			
	係長	前田 和也 (平成9年5月31日まで)			
	主査	西川 大			
調査	参事	近藤 和史			
	主任文化財専門員	大山 眞充			
	主任文化財専門員	藤好 史郎			
上天神遺跡	文化財専門員	宮崎哲治		文化財専門員	濱松春水
	文化財専門員	岡本 利		調査技術員	多田 歩
	調査技術員	東条貴美	原間遺跡	文化財専門員	片桐孝浩
林・坊城遺跡	技 師	乗松真也		技 師	野崎隆亨
	技 師	住野正和		調査技術員	大屋敷慶子
前田東・中村遺跡	文化財専門員	宮崎哲治		文化財専門員	植松邦浩
	文化財専門員	喜岡永光		文化財専門員	濱松春水
	調査技術員	森川 歩		調査技術員	多田 歩
	文化財専門員	山元素子	成重遺跡	文化財専門員	森 格也
	技 師	住野正和		主任文化財専門員	長元茂樹
	調査技術員	藤澤正則		調査技術員	東条貴美
馬篠・小砂地区	技 師	信里芳紀		技 師	信里芳紀
	主任技師	松岡宏一		主任技師	松岡宏一
楠谷・高原・別所	文化財専門員	樋本清輝		調査技術員	香川直孝
・杖の端地区	技 師	香西 亮		技 師	長井博志
	調査技術員	糸山 晋		主任技師	多田 慎
楠谷遺跡	文化財専門員	樋本清輝		調査技術員	森澤千尋
	技 師	香西 亮		文化財専門員	西岡達哉
	調査技術員	糸山 晋		技 師	豊島 修
西谷遺跡	文化財専門員	植松邦浩	池の奥地区	文化財専門員	西岡達哉

	技 師 乗松真也		主任技師 松岡宏一
	技 師 豊島 修		技 師 信里芳紀
	文化財専門員 池田道雄		技 師 豊島 修
	調査技術員 山坂浩樹	庵 の 谷 遺 跡	文化財専門員 樋本清輝
鹿庭・黒羽地区	文化財専門員 西岡達哉		技 師 香西 亮
	文化財専門員 森 格也		調査技術員 糸山 晋

4. 本書の執筆は、第1章については大山・藤好が、第2章についてはそれぞれ担当者が行い、目次にその文責を記している。また、本書の編集は片桐が担当した。

5. 挿図の一部に、国土地理院地形図（1/25,000）を使用した。

# 目 次

第1章 平成9年度調査の概要 .....	(大山・藤好)	1
第2章 調査の概要 .....		14
上天神遺跡 .....		14
1. 立地と環境 .....	(宮崎)	14
2. 調査の成果 .....	(宮崎)	14
3. 旧地形の復原 .....	(宮崎)	16
林・坊城遺跡 .....		18
1. 立地と環境 .....	(池田)	18
2. 調査の成果 .....	(乗松)	20
3. ま と め .....	(乗松)	25
前田東・中村遺跡 .....		26
1. 立地と環境 .....	(喜岡)	26
2. 調査の成果 .....	(宮崎・山元)	27
3. ま と め .....	(宮崎・山元)	32
楠谷遺跡 .....		34
1. 立地と環境 .....	(香西)	34
2. 調査の成果 .....	(樋本)	35
3. ま と め .....	(樋本)	39
西谷遺跡 .....		40
1. 立地と環境 .....	(浜松)	40
2. 予備調査結果と基本層序 .....	(植松)	42
3. 本調査結果 .....	(植松)	48
4. ま と め .....	(植松)	69
原間遺跡 .....		70
1. 立地と環境 .....	(野崎)	70
2. 調査の成果 .....	(片桐・野崎・植松)	70
3. ま と め .....	(片桐)	85
成重遺跡 .....		86
1. 立地と環境 .....	(多田)	86
2. 調査の成果 .....	(森・信里・長井)	88
3. ま と め .....	(森)	127
善門池西遺跡 .....		129
1. 立地と環境 .....	(西岡)	129
2. 調査の成果 .....	(西岡)	129
庵の谷遺跡 .....		131
1. 立地と環境 .....	(香西)	131
2. 調査の成果 .....	(樋本)	132
3. ま と め .....	(樋本)	134



## 挿 図 目 次

第 1 図 埋蔵文化財発掘調査対象地位置図 … 4	第 45 図 S B 03平・断面図 …… 52
第 2 図 馬篠地区予備調査トレンチ配置図 … 5	第 46 図 S B 04平・断面図 …… 53
第 3 図 小砂地区予備調査トレンチ配置図 … 5	第 47 図 S B 05平・断面図 …… 53
第 4 図 楠谷 c 地区予備調査トレンチ配置図 … 6	第 48 図 II 区遺構配置図(主要部) …… 55, 56
第 5 図 高原地区予備調査トレンチ配置図 … 7	第 49 図 S B 06平・断面図 …… 57
第 6 図 別所地区予備調査トレンチ配置図 … 7	第 50 図 S B 07平・断面図 …… 58
第 7 図 杖の端地区予備調査トレンチ配置図 … 8	第 51 図 S B 08平・断面図 …… 59
第 8 図 原間遺跡(西丘陵)予備調査トレンチ配置図 … 8	第 52 図 S B 09平・断面図 …… 61
第 9 図 原間遺跡予備調査トレンチ配置図 … 9	第 53 図 S D 03土層断面図 …… 62
第 10 図 池の奥地区予備調査トレンチ配置図 … 10	第 54 図 S R 01上層及び包含層出土遺物実測図 … 63
第 11 図 法月地区予備調査トレンチ配置図 … 11	第 55 図 S R 02出土遺物実測図 …… 64
第 12 図 鹿庭地区予備調査トレンチ配置図 … 12	第 56 図 S D 01・02出土遺物実測図 …… 64
第 13 図 黒羽地区予備調査トレンチ配置図 … 13	第 57 図 S B 01~05・S P 65出土遺物実測図 … 64
第 14 図 遺跡の位置 …… 14	第 58 図 S B 01・S R 02出土杯断面比較図 … 65
第 15 図 トレンチ配置図 …… 14	第 59 図 S B 06~09出土遺物実測図 …… 65
第 16 図 上天神遺跡周辺の旧形復元想定図 … 17	第 60 図 S X 01出土遺物実測図 …… 66
第 17 図 周辺遺跡地図 …… 18	第 61 図 S D 03出土遺物実測図 …… 66
第 18 図 調査区割図 …… 19	第 62 図 原間遺跡調査区配置図 …… 71
第 19 図 S R 01流路 A 土層断面図 …… 23	第 63 図 I 区 S H 03出土遺物実測図 …… 72
第 20 図 D・H・I 地区遺構配置図 …… 21, 22	第 64 図 I 区遺構配置図 …… 73, 74
第 21 図 S R 01流路 A 下層 b 出土遺物 …… 23	第 65 図 I 区 S H 03平・断面図 …… 75
第 22 図 円形周溝墓周溝土層断面図 …… 23	第 66 図 I 区 S H 06平・断面図 …… 77
第 23 図 円形周溝墓出土遺物 …… 23	第 67 図 III 区遺構配置図 …… 78
第 24 図 円形周溝墓平面図 …… 24	第 68 図 III 区 S H 01平・断面図 …… 79
第 25 図 遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 26	第 69 図 III 区 S H 01・S D 01出土遺物実測図 … 79
第 26 図 I ①区 S E 01平・断面図 …… 28	第 70 図 S B 01平・断面図 …… 80
第 27 図 調査区割図 …… 29, 30	第 71 図 IV 区遺構配置図 …… 81, 82
第 28 図 遺構配置図 …… 29, 30	第 72 図 周辺遺跡分布図 …… 87
第 29 図 J ①区 S B 01平・断面図 …… 31	第 73 図 調査区割図 …… 88
第 30 図 M ①区 S P 72土器出土状況 …… 33	第 74 図 A 区~D 区第 2 遺構面遺構配置図 … 89, 90
第 31 図 M ①区 S B 01平・断面図 …… 33	第 75 図 E 区~G 区第 2 遺構面遺構配置図 … 91, 92
第 32 図 遺跡の位置及び周辺の遺跡 …… 34	第 76 図 D 2 区第 2 面 S D 05出土遺物 …… 93
第 33 図 調査区配置図 …… 35	第 77 図 D 1 区第 2 面 S H 01平・断面図, 出土遺物 …… 94
第 34 図 S B 01平・断面図 …… 36	第 78 図 D 1 区第 2 面 S H 02平・断面図, 出土遺物 …… 95
第 35 図 遺構配置図 …… 37, 38	第 79 図 D 1 区第 2 面 S H 03平・断面図, 出土遺物 …… 96
第 36 図 遺跡の位置及び周辺の遺跡 …… 41	第 80 図 C 2 区第 2 面 S K 02平・断面図 … 97
第 37 図 トレンチ配置状況と遺構配置概念図 … 43, 44	第 81 図 C 2 区第 2 面 集石墓 K 01平・断面図 …… 99, 100
第 38 図 圃場整備前丈量図での 遺構配置概念図 …… 47	第 82 図 C 2 区第 2 面 集石墓 K 01磔堆内出土遺物 …… 102
第 39 図 周辺地形図での遺構配置概念図 … 47	第 83 図 E 1 区第 2 面集石墓 1 出土遺物 … 104
第 40 図 S D 01・02土層断面図 …… 48	第 84 図 E 1 区第 2 面集石墓 2
第 41 図 I 区南壁土層断面図 …… 49	
第 42 図 I 区遺構配置図 …… 50	
第 43 図 S B 01平・断面図 …… 51	
第 44 図 S B 02平・断面図 …… 52	

	平・立・断面図 ……………	106	第99図	F 1区第1面S B01平・断面図 ……	120
第85図	E 1区第2面集石墓2出土遺物 ……	107	第100図	F 1区第1面S B02平・断面図 ……	120
第86図	A区～D区 第1遺構面遺構配置図 ……………	109, 110	第101図	F 1区第1面S K06 平・断面図, 出土遺物 ……………	121
第87図	E区～G区 第1遺構面遺構配置図 ……………	111, 112	第102図	F 1区第1面 S K33平・断面図, 出土遺物 ……	121
第88図	E 2区第1面 S H01平・断面図, 出土遺物 ……	113	第103図	B区第1面S B01平・断面図 ……	122
第89図	F 1区第1面 S H01平・断面図, 出土遺物 ……	114	第104図	G 1区第1面 S B01平・断面図, 出土遺物 ……	123
第90図	F 1区第1面 S H06平・断面図, 出土遺物 ……	115	第105図	G 1区第1面S B02平・断面図 ……	124
第91図	F 1区第1面 S H09平・断面図 ……………	115	第106図	G 1区第1面S K15平・断面図 ……	124
第92図	F 1区第1面S H09出土遺物 ……	116	第107図	G 1区第1面 S K20平・断面図, 出土遺物 ……	125
第93図	A 1区第1面土坑列平面図 S K06平・断面図 ……………	116	第108図	G 1区第1面S P01平・断面図 ……	125
第94図	C 2区第1面S K23平・断面図 ……	117	第109図	G 1区第1面S P01出土遺物 ……	126
第95図	C 2区第1面S K23出土遺物 ……	117	第110図	G 1区第1面 S P02平・断面図, 出土遺物 ……	126
第96図	F 1区第1面 S K47平・断面図, 出土遺物 ……	118	第111図	G 1区第1面 S X01平・断面図, 出土遺物 ……	127
第97図	C 1区第2面S R01出土遺物 ……	118	第112図	遺跡位置図 ……………	129
第98図	F 1区第1面 S X01平・断面図, 出土遺物 ……	119	第113図	遺跡配置図 ……………	130
			第114図	遺跡の位置及び周辺の遺跡 ……	131
			第115図	調査区割図 ……………	132
			第116図	I区遺構配置図 ……………	133

## 写真目次

写真1	トレンチ1全景(東より) ……………	15		(南西より, 手前下方S R01) ……	42
写真2	トレンチ3全景(西より) ……………	15	写真20	S B01～05近景 及びI区南壁土層(西より) ……	46
写真3	H地区全景(西より) ……………	20	写真21	I区上面遺構完掘状況 (東より, 手前S R01, 右S D01・02) ……	48
写真4	I地区全景(南より) ……………	20	写真22	I区下面遺構完掘状況 (東より, 中央S B01～05) ……	51
写真5	円形周溝墓遺物出土状況(西より) ……	23	写真23	S B01-P09 柱根検出状況(北より) ……………	51
写真6	壺形土器出土状況(西より) ……	23	写真24	S B04-P01及びS B05-P06 柱根検出状況(東より) ……………	53
写真7	甕形土器出土状況(西より) ……	23	写真25	S A01-P01柱根検出状況(西より) ……	54
写真8	I①区S D・S E全景(南より) ……	28	写真26	II区a遺構完掘状況 (南より, 中央S D03) ……………	54
写真9	I①区全景(東より) ……………	29, 30	写真27	II区b遺構完掘状況 (南より, 手前S B09) ……………	54
写真10	I①区S R01 遺物出土状況(西より) ……………	29, 30	写真28	II区a南西壁土層(北東より) ……	57
写真11	J①区全景(東より) ……………	31	写真29	S B06, 07近景(南より) ……	58
写真12	M①区上層遺構全景(北より) ……	33	写真30	S B07-P11 根石検出状況(西より) ……………	58
写真13	M①区S P72土器出土状況(南より) ……	33			
写真14	S B01全景(北より) ……………	36			
写真15	II区南壁部暗渠(北より) ……………	39			
写真16	II区全景(西より) ……………	39			
写真17	III区全景(南より) ……………	39			
写真18	遺跡遠景(北より, 右後方虎丸山)	40			
写真19	予備調査トレンチ2全景				

写真31	S B08近景(南より) ……	59	検出状況(北より) ……	88	
写真32	S B08-P01根石検出状況(北より) …	60	写真65	集石墓K02・03・04 検出状況(東より) ……	97
写真33	S B08-P02 根石, 添石検出状況(南より) ……	60	写真66	C2区第2面集石墓K01 礫堆検出状況(北より) ……	98
写真34	S B08-P03根石検出状況(東より) …	60	写真67	C2区第2面集石墓K01 礫堆内土器出土状況(西より) ……	98
写真35	S B08-P04 根石, 添石検出状況(南西より) …	60	写真68	C2区第2面集石墓K01 検出状況(南西より) ……	101
写真36	S B08-P06 根石, 添石検出状況(東より) ……	60	写真69	C2区第2面集石墓K01, 土墳墓列 (北より) ……	101
写真37	S B08-P07根石検出状況(南より) …	60	写真70	E1区第2面集石墓1(北より) …	103
写真38	Ⅱ区北壁S D03部分 土層断面(南より) ……	61	写真71	E1区第2面集石墓1断面(東より) …	103
写真39	I区包含層出土遺物 ……	67	写真72	E1区第2面 集石墓2墳丘上面(西より) ……	105
写真40	I区整地土・S R01上層出土遺物 …	67	写真73	E1区第2面集石墓2 墳丘内部集石状況(南より) ……	105
写真41	I区S R02出土遺物 ……	67	写真74	E1区第2面集石墓2 主体部検出状況(南より) ……	105
写真42	I区S D01・02出土遺物 ……	67	写真75	E1区第2面集石墓2 主体部木棺部分(西より) ……	105
写真43	I区S B01~05, S P65出土遺物 …	67	写真76	F1区第2面集石墓6 (西より) ……	108
写真44	Ⅱ区S B06~09出土遺物 ……	67	写真77	F1区第2面集石墓8~11(北より) …	108
写真45	Ⅱ区S X01出土遺物 ……	67	写真78	F1区第1面S H01 完掘状況(南より) ……	114
写真46	Ⅱ区S D03出土遺物 ……	67	写真79	F1区第1面S H06 甕出土状況(南より) ……	114
写真47	調査区近景(北より) ……	72	写真80	C2区第1面S K23(南より) ……	117
写真48	I区S H03完掘状況(南より) ……	72	写真81	B区第1面S B01・02(北より) …	122
写真49	I区S H06(焼失家屋) 検出状況(西より) ……	76	写真82	B区第1面完掘状況(北西より) …	122
写真50	I区S H06完掘状況(西より) ……	76	写真83	D2区第1面S X01 検出状況(南より) ……	123
写真51	Ⅲ区遺構完掘状況(北より) ……	79	写真84	G1区第1面S K15 検出状況(東より) ……	124
写真52	Ⅳ-①区遺構完掘状況(南より) …	83	写真85	G1区第1面S P02 遺物出土状況(南より) ……	126
写真53	Ⅳ-①区S B02完掘状況(南より) …	83	写真86	G1区第1面S X01全景(西より) …	126
写真54	Ⅳ-②区S R06土器溜り(南より) …	83	写真87	遺構検出状態 ……	129
写真55	Ⅳ-①区S H03完掘状況(南より) …	83	写真88	遺物出土状態 ……	129
写真56	Ⅳ-①区S H01完掘状況(東より) …	83			
写真57	Ⅳ-⑥区遺構完掘状況(南より) …	83			
写真58	Ⅳ-③区遺構完掘状況(南より) …	84			
写真59	Ⅳ-③区S H06完掘状況(北より) …	84			
写真60	Ⅳ-③区S H05完掘状況(南より) …	84			
写真61	Ⅳ-③区S H04(焼失家屋) 検出状況(南より) ……	84			
写真62	Ⅳ-③区S H04完掘状況(南より) …	84			
写真63	Ⅳ-③区S R06土器溜り(南より) …	84			
写真64	D2区第2面S D05				

## 表 目 次

表1	四国横断自動車道建設に伴う 埋蔵文化財調査一覧 ……	3	表2	西谷遺跡出土遺物観察表 ……	68
			表3	I区包含層出土石製品 ……	134

# 第1章 平成9年度調査の概要

四国横断自動車道のうち高松市内区間及び津田引田間建設に伴う埋蔵文化財調査は昨年度から開始され、本年度で2年目となった。本年度の当初計画では高松市内区間が約16,500㎡、津田～引田間が約65,000㎡を調査する予定であったが、用地買収・家屋撤去の遅れ、工事工程との調整、また予備調査の後に本調査に至らなかった遺跡や遺構面が2面確認された遺跡などがあり、当初計画とは異なる進行となった。

高松市内区間の本年度の調査面積は4,720㎡で、昨年度実績と合わせると全体(約50,000㎡)の16.8%が終了したことになる。一方津田引田間については、本年度の調査面積は46,813㎡で、昨年度実績と合わせると全体(約160,000㎡)の33%が終了したことになる。

## 1. 高松市内区間調査の概要

高松市内区間の埋蔵文化財発掘調査は、年度当初は香川郡条里B、上天神遺跡、東山崎・水田遺跡、前田東・中村遺跡の合計16,500㎡を実施する計画であったが、用地買収の遅れや工事工程との調整の結果、上天神遺跡、前田東・中村遺跡、林・坊城遺跡の3遺跡の発掘調査を実施した。

上天神遺跡については当初500㎡の調査を予定していたが、用地上の目途がついた箇所190㎡について予備調査と工事立会を実施した。なお、上天神遺跡については、建設省四国地方建設局と日本道路公団四国支社との委託契約により実施した。

前田東・中村遺跡については、6ヶ月の期間で5,000㎡の調査を実施する予定であったが、10ヶ月の期間に変更し、4,040㎡(延べ面積6,780㎡)の調査を実施し完了した。

林・坊城遺跡については工事工程との結果、国道11号に面したインターチェンジの緑地帯で現状保存される箇所を除いたループ道路部490㎡の発掘調査を繰り上げて実施した。

## 2. 津田引田間調査の概要

馬篠地区は7・8月に尾根及び谷筋にトレンチを設定し、予備調査を実施したが、D地区の尾根において土坑1基を検出した。直軸2m、短軸1.8mの長方形で深さは0.35mの土坑で炭化物が多量に堆積していた。時期、性格は不明であり、A～C地区では遺構・遺物は検出されなかったため、予備調査をもって本地区の調査は完了となった。

小砂地区においても6月に丘陵平坦地に2本のトレンチを設定し予備調査を実施したが、表土直下で岩盤を検出し、近年の削平地であることが確認されたので、本地区も予備調査を持って調査を完了した。

楠谷地区はA・B・Cの3地区あるが、A地区は本年度予備調査を計画していたが、保安林解除の手続きが整わなかったため次年度以降に延期した。B地区については昨年度の予備調査で遺構・遺物が検出されたため、本年度本調査を実施した。この地点の集落跡に関連した墳墓の存在が予想されたC地区については9月に予備調査を実施したが、遺構・遺物は検出されなかった。

高原地区は墳墓の所在が予想されたため9月に予備調査を実施したが、遺構・遺物は検出されなかったので、今回の予備調査を持って調査完了となった。

下屋敷地区は平成8年度に一部予備調査を実施し、本調査範囲を特定していたが、家屋撤去が遅れた

ため、本年度については、次年度初めからの本調査の準備（仮施設の設置等）を行った。

別所地区は与田川東岸の丘陵部で、尾根筋にトレンチを設定し、まず予備調査を行った。その結果A地区の尾根先端部で石棺の蓋石を検出した。その他溝状遺構が数条検出され、墳墓の周溝の可能性もあるため次年度以降尾根筋を中心に1,300㎡について本調査を実施する予定である。B地区の尾根筋においてもトレンチを設定して予備調査を行ったが、遺構・遺物は検出されなかったため、この地区については調査は完了となった。

杖の端地区は4月にまず平地部について予備調査を実施した。その結果対象地の両端の丘陵裾部においてピット等の遺構を検出したため、予備調査後引き続き本調査を実施した。遺跡の名称については、杖の端と言う名称がすでに他遺跡に使用されていたため、この地区の呼び名である西谷（にしやだに）を遺跡名として採用した。本調査後東丘陵部についても予備調査を実施したが、遺構・遺物は検出されなかったため、この地区の調査は今年度の調査ですべて完了した。

原間遺跡は昨年度に引き続き4月から予備調査を再開した。この地区の工事対象面積は約49,000㎡であるが、予備調査の結果西丘陵頂部からは古墳時代中期の古墳が確認され、東丘陵からは周知の遺跡である横穴式石室の他弥生時代の遺構が検出された。また中央の平野部では古川の隣接地は河川氾濫源となっていたが、それ以外の地域からは弥生時代～中世の遺構・遺物が検出され、約42,000㎡について本調査が必要と判断された。本調査対象のうち北部の約5,000㎡については県主体の工事となったため県道建設事業として発掘調査を実施し、残りを公団事業として本年度と来年度に調査することとなった。

成重遺跡については昨年度の予備調査の結果、約28,000㎡の本調査が確定していたため、年度当初より本調査に着手した。

池の奥地区は12月に予備調査を実施した。その結果東側では弥生時代の集落跡が確認され、西側では中世の集落跡が確認されたため、予備調査終了後の1月から西側の中世集落跡の一部について本調査を実施した。なお遺跡の名称については、池の奥遺跡は東側の弥生時代集落跡にすでに用いられているが、西側は時代が異なる遺跡のため、近くの溜池の名称を用い善門池西遺跡という新しい名称を採用した。

法月地区は1月に予備調査を実施したが、遺構・遺物は検出されなかったため、今回の予備調査をもって調査は完了した。

鹿庭遺跡は7・8月及び10に予備調査を実施した。その結果対象地中央部分で縄文時代と推定される土坑や中世のピット等が検出されたので、次年度以降に3,800㎡について本調査を実施する予定である。

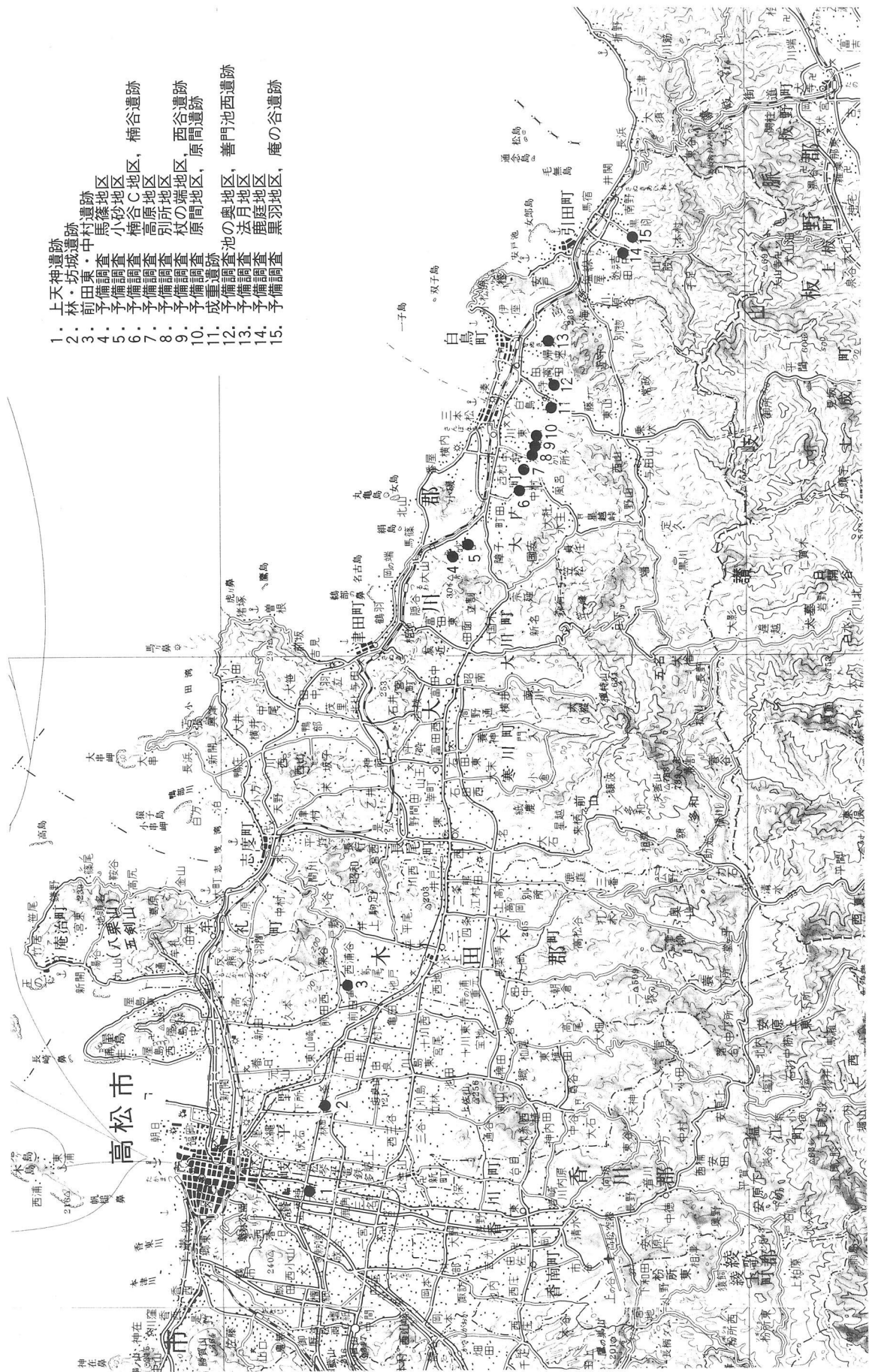
黒羽地区は9・10月にまず予備調査を実施した。馬宿川東側に広がる平野部は砂礫の堆積が厚く、遺構・遺物は確認されなかったが、対象地東端の狭い丘陵部において弥生時代の集落跡を確認したため、引き続き本調査を実施した。なお遺跡の名称については、黒羽は広範囲を指し示す地名のため不相当と考え、遺跡が所在する谷間を呼称する庵の谷を採用することにした。

以上の津田引田間調査の大半は日本道路公団四国支社の委託をうけたのであるが、楠谷地区20㎡、高原地区11㎡、杖の端地区（西谷遺跡）438㎡、原間遺跡856㎡、成重遺跡811㎡については香川県土木部より委託をうけて実施した。

NO	区 間	地 区 名	遺 跡 名	所 在 地	調査総面積 (㎡)	年度別調査面積(㎡)			備 考
						8年度	9年度	10年度以降	
1	高松～善通寺	香川郡条里A	中間東井坪	高松市中間町	709	709	0	0	8年度で調査完了
2		正箱	正箱	高松市壇紙町	800	0	0	800	
3		香川郡条里B		〃	4,000	0	0	4,000	
4	高松～高松	林・坊城	林・坊城	高松市林町	2,699	481	490	1,728	8年度で調査完了
5		山田郡条里A	林浴	〃	2,626	2,626	0	0	
6		前田東・中村	前田東・中村	高松市前田東町	8,782	0	4,040	4,742	
(小計)					19,616	3,816	4,530	11,270	
7	高松～善通寺	香川郡条里B		高松市壇紙町	14,000	0	0	14,000	
8	高松～高松	香川郡条里C		高松市勅使町	5,000	0	0	5,000	
9		香川郡条里D	(田村)	高松市田村町	2,500	0	0	2,500	
10			上天神	高松市上天神町	190	0	190	0	9年度で調査完了
11		東山埜・水田	東山埜・水田	高松市東山埜町	3,000	0	0	3,000	
12	前田東・中村	前田東・中村	高松市前田東町	4,364	0	0	4,364		
(小計)					29,054	0	190	28,864	
市内区間合計					48,670	3,816	4,720	40,134	
13	津田～引田	中谷	中谷	大川郡津田町鶴羽	518	518	0	0	8年度で調査完了
14		大山	大山	〃	2,113	2,113	0	0	〃
15		馬篠A～D		大川郡大内町馬篠	620	0	620	0	9年度で調査完了
16		小砂		大川郡大内町小砂	100	0	100	0	〃
17		中山A		大川郡大内町中山	450	0	0	450	
18		中山B		〃	450	0	0	450	
19		中山C		〃	750	0	0	750	
20		中山D		〃	7,000	0	0	7,000	
21		三殿A		大川郡大内町三殿	7,500	0	0	7,500	
22		三殿B		〃	750	0	0	750	
23		町田		大川郡大内町町田	300	0	0	300	
24		楠谷A		大川郡大内町水主	1,000	0	0	1,000	
25		楠谷B	楠谷	〃	1,960	460	1,500	0	9年度で調査完了
26		楠谷C		〃	78	0	78	0	〃
27		高原		〃	11	0	11	0	〃
28		下屋敷	下屋敷	〃	4,546	446	100	4,000	
29		別所A		大川郡大内町川東	1,315	0	15	1,300	
30		別所B		〃	29	0	29	0	9年度で調査完了
31		杖の端	西谷	〃	2,092	0	2,092	0	〃
32		原間	原間	〃	43,693	500	19,254	23,939	
33		樋端A		大川郡白鳥町白鳥	2,400	0	0	2,400	
34		樋端B		〃	700	0	0	700	
35		樋端C		〃	160	0	0	160	
36		樋端D		〃	400	0	0	400	
37		樋端E		〃	3,750	0	0	3,750	
38		成重	成重	〃	28,699	1,500	14,650	12,549	
39		谷		〃	2,500	0	0	2,500	
40		池の奥	善門池西	〃	7,116	0	3,566	3,550	
41	池の奥		〃	8,700	0	0	8,700		
42	法月		大川郡白鳥町帰来	510	0	510	0	9年度で調査完了	
43	塩屋A		大川郡引田町引田	1,500	0	0	1,500		
44	塩屋B		〃	8,400	0	0	8,400		
45	辻田A		〃	4,800	0	0	4,800		
46	辻田B		〃	5,600	0	0	5,600		
47	鹿庭	鹿庭	大川郡引田町吉田	4,110	0	310	3,800		
48	黒羽	庵の谷	大川郡引田町黒羽	3,978	0	3,978	0	9年度で調査完了	
津田引田間合計					158,598	5,537	46,813	106,248	
総計					207,268	9,353	51,533	146,382	

※ 調査面積には県及び建設省負担分を含む。

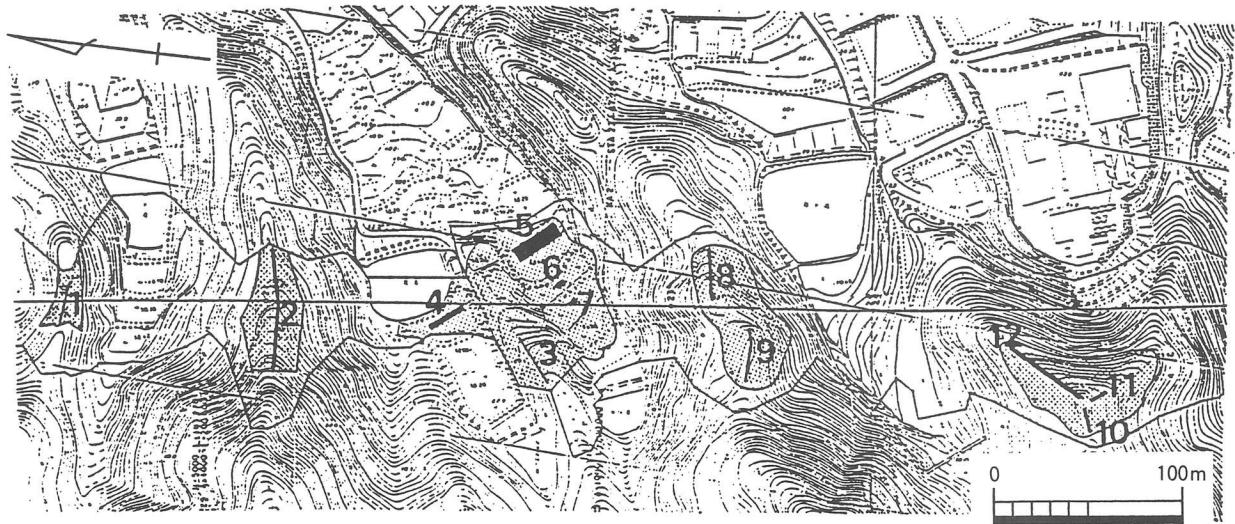
表1 四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査一覧



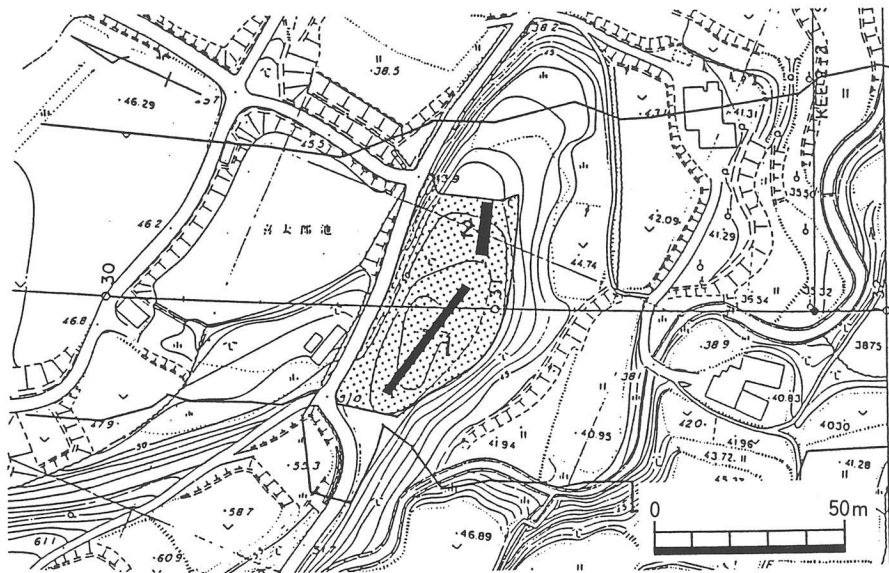
- 1. 天神遺跡
- 2. 坊城遺跡
- 3. 東・田子備調査
- 4. 東・田子備調査
- 5. 東・田子備調査
- 6. 東・田子備調査
- 7. 東・田子備調査
- 8. 東・田子備調査
- 9. 東・田子備調査
- 10. 東・田子備調査
- 11. 東・田子備調査
- 12. 東・田子備調査
- 13. 東・田子備調査
- 14. 東・田子備調査
- 15. 東・田子備調査

第1図 埋蔵文化財発掘調査対象地位置図 (1/200,000)



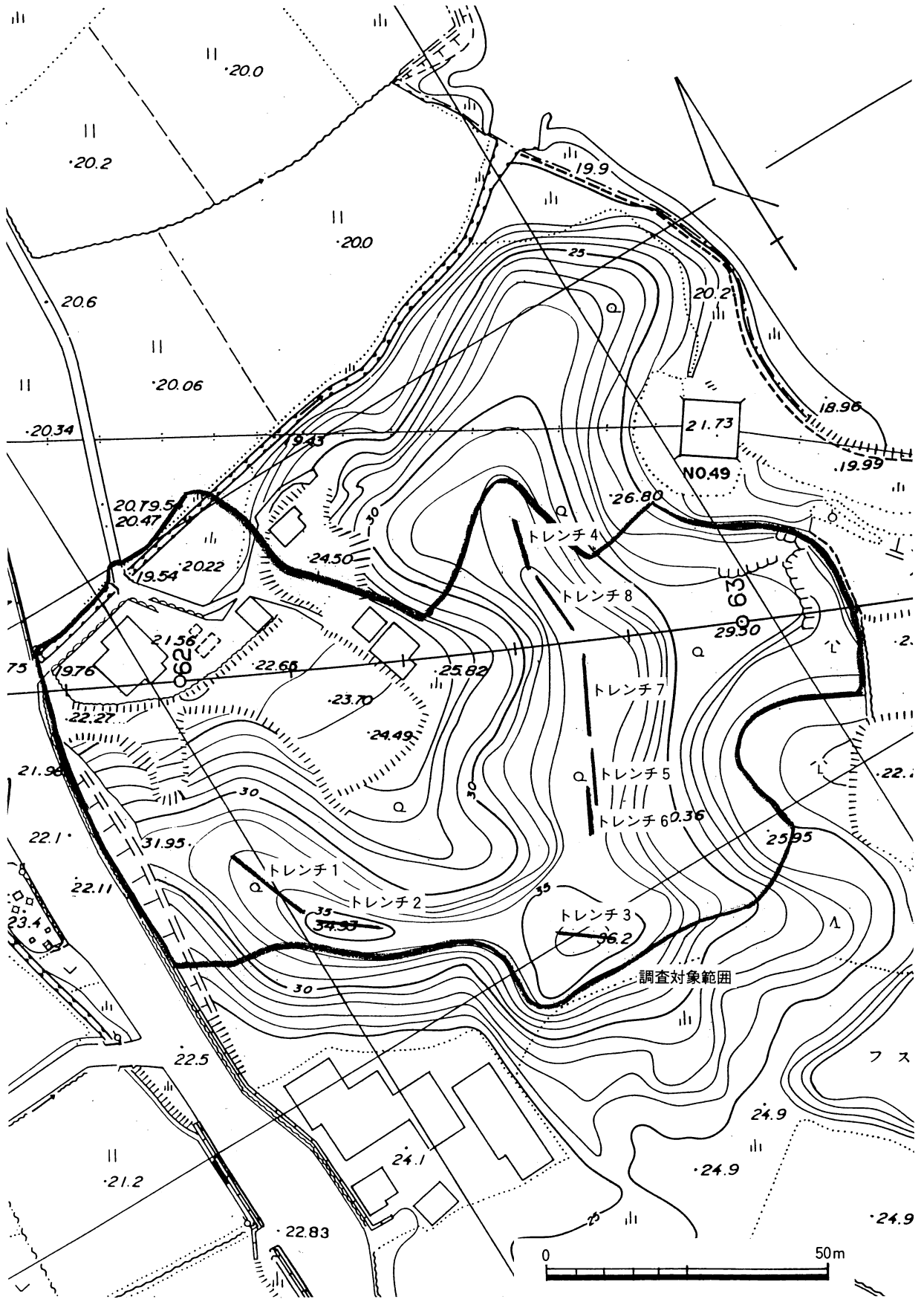


第2図 馬篠地区予備調査トレンチ配置図 (1/2,000)

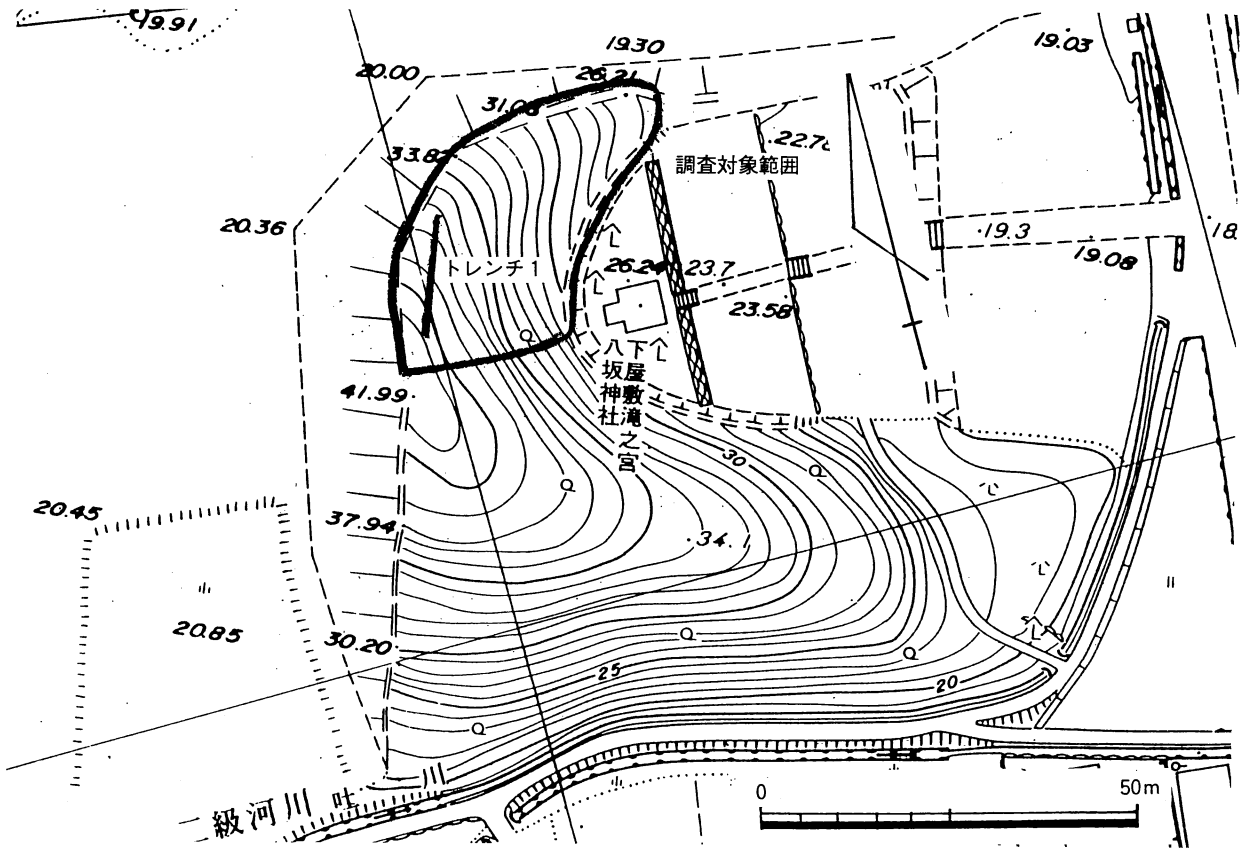


第3図 小砂地区予備調査トレンチ配置図 (1/2,000)

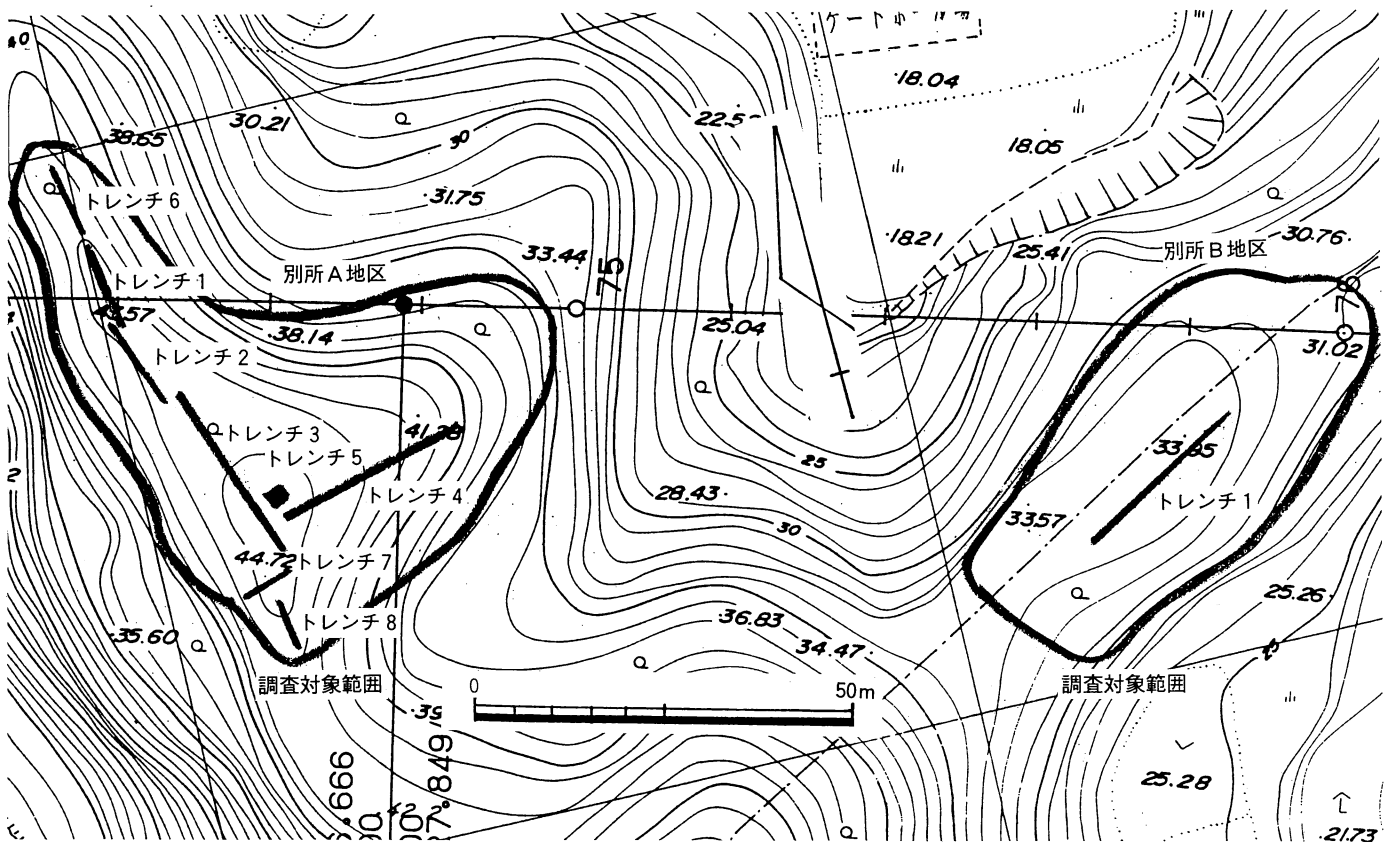




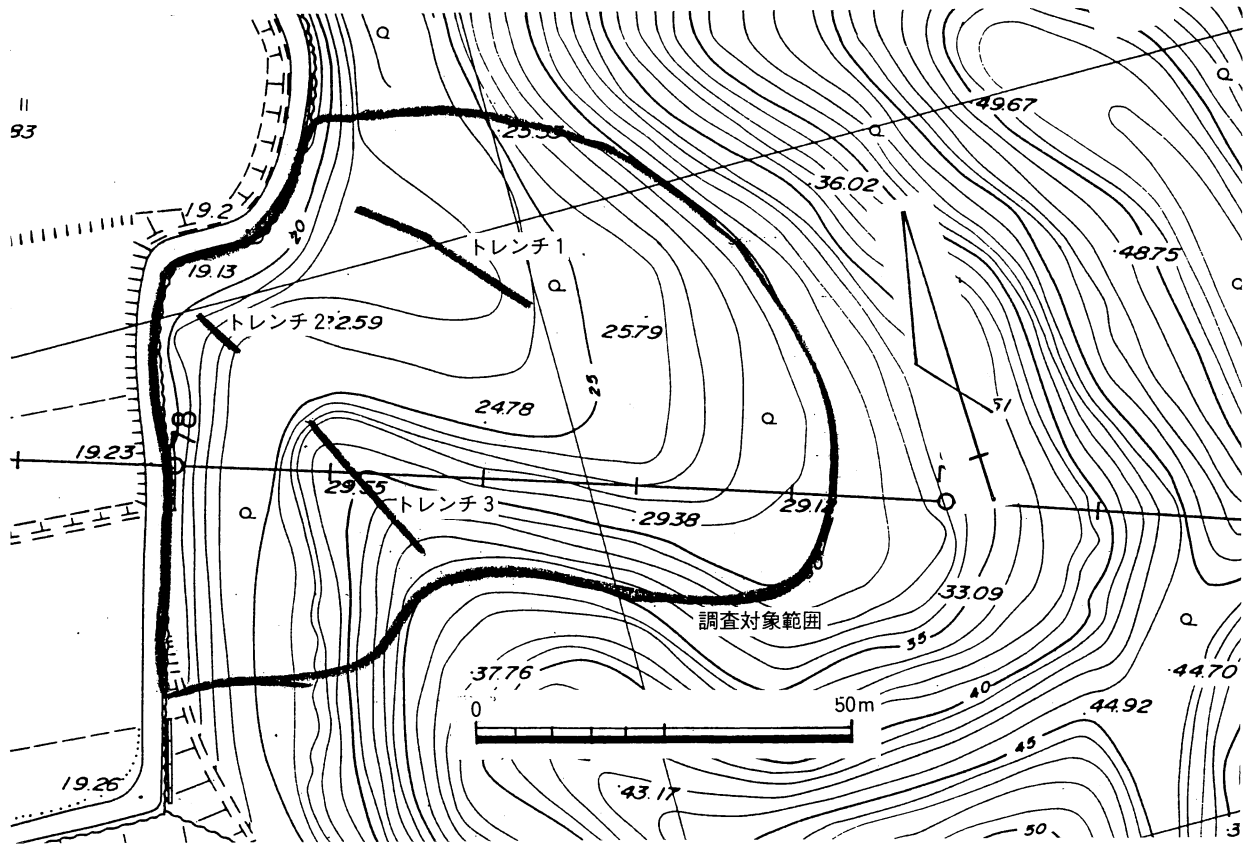
第4図 楠谷C地区予備調査トレンチ配置図 (1/1,000)



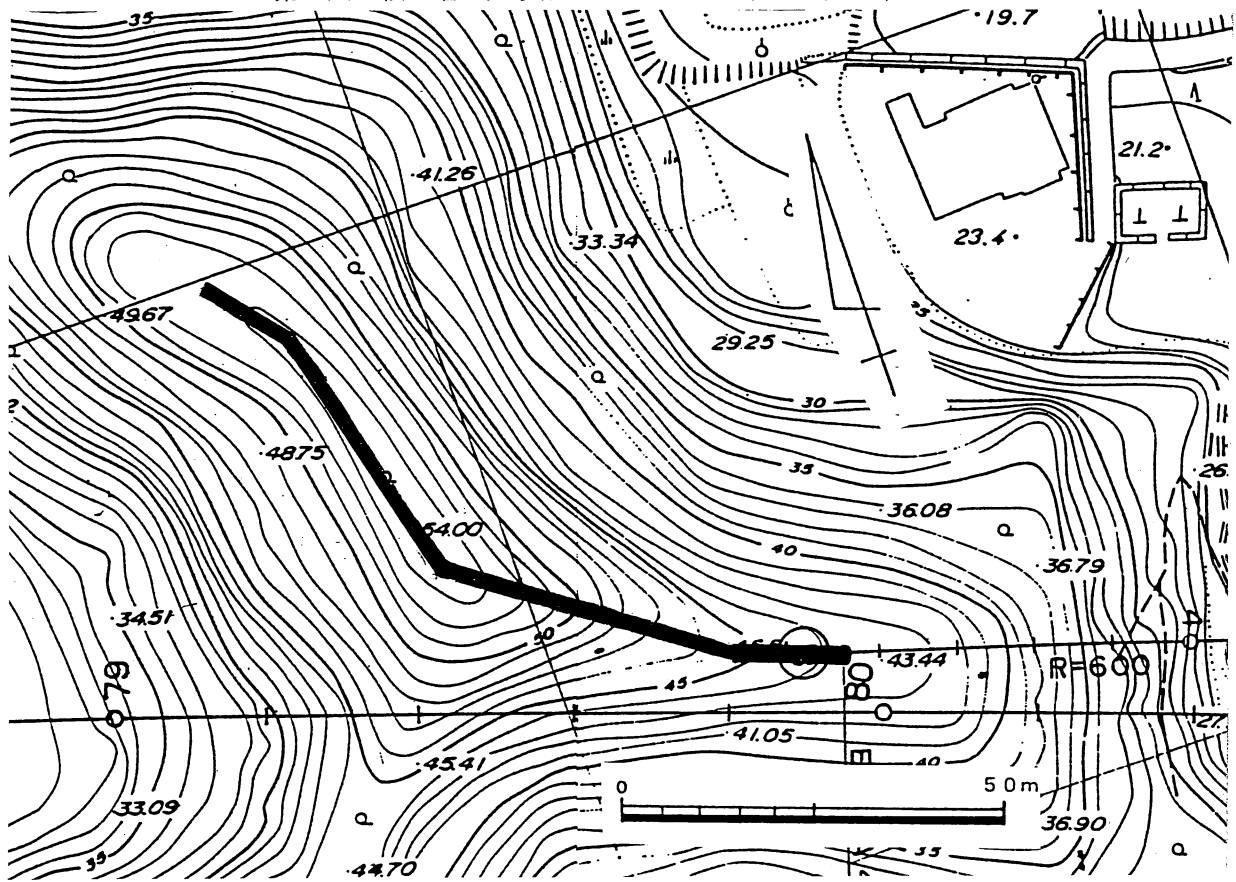
第5図 高原地区予備調査トレンチ配置図 (1/1,000)



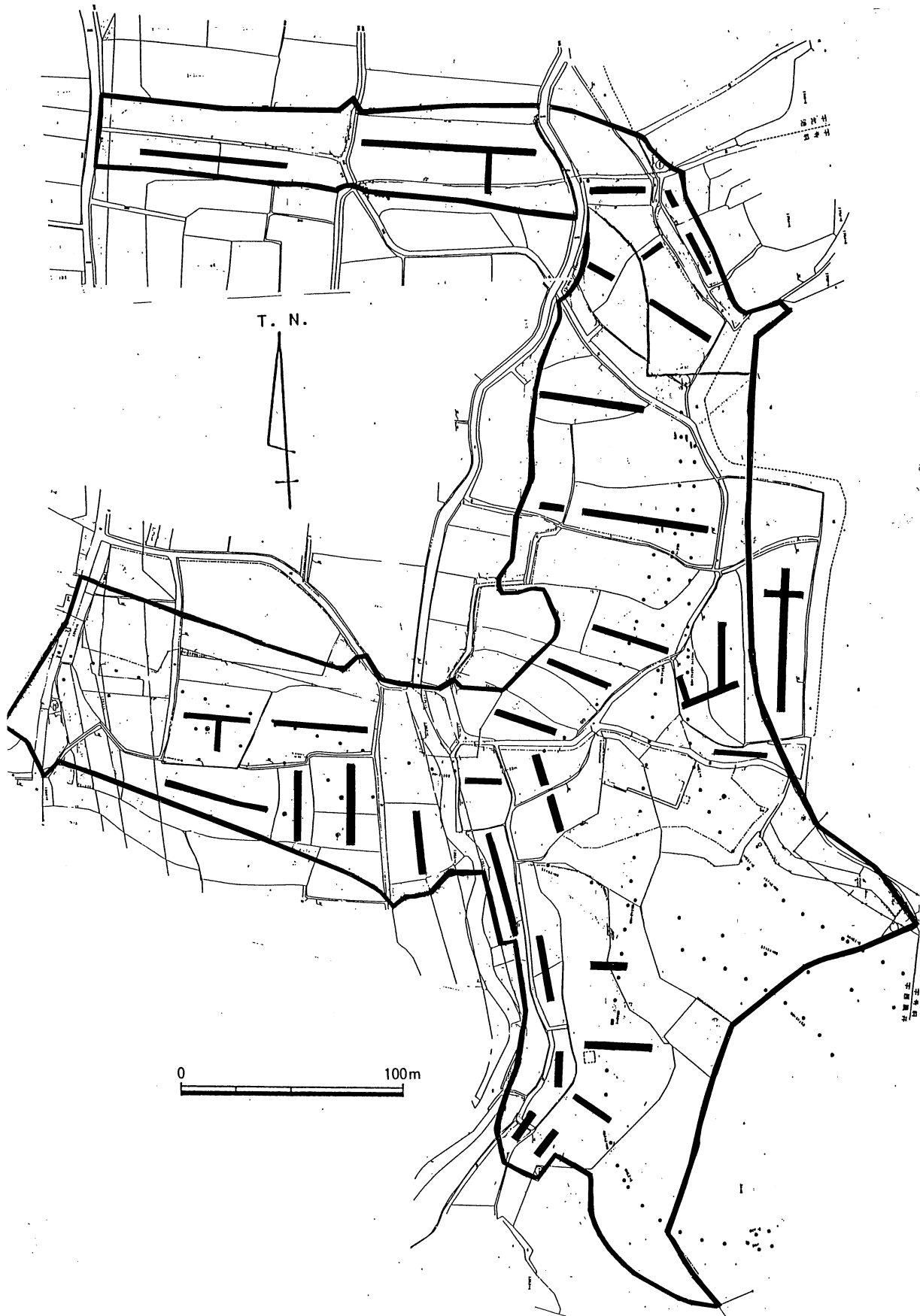
第6図 別所地区予備調査トレンチ配置図 (1/1,000)



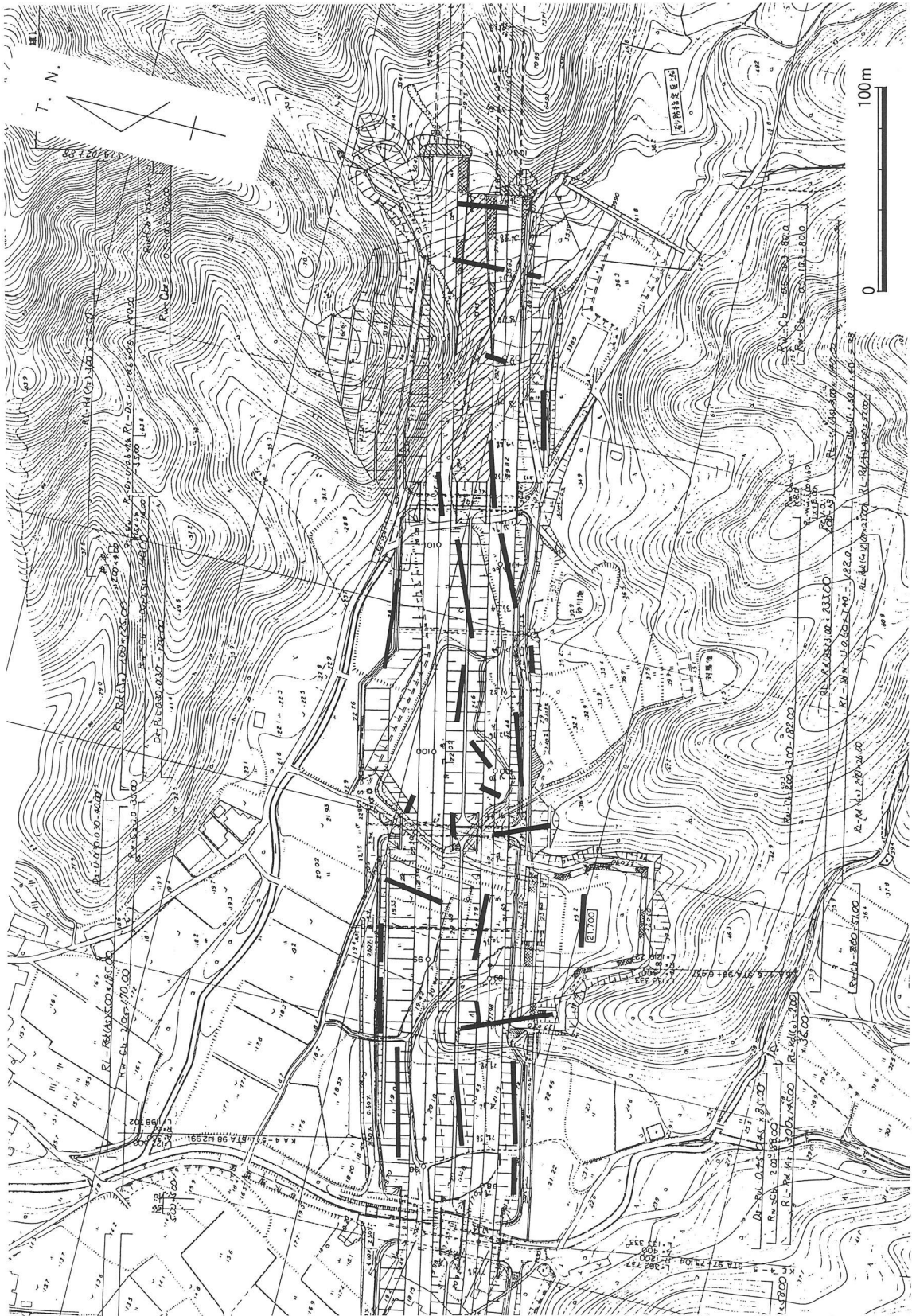
第7図 杖の端地区予備調査トレンチ配置図 (1/1,000)



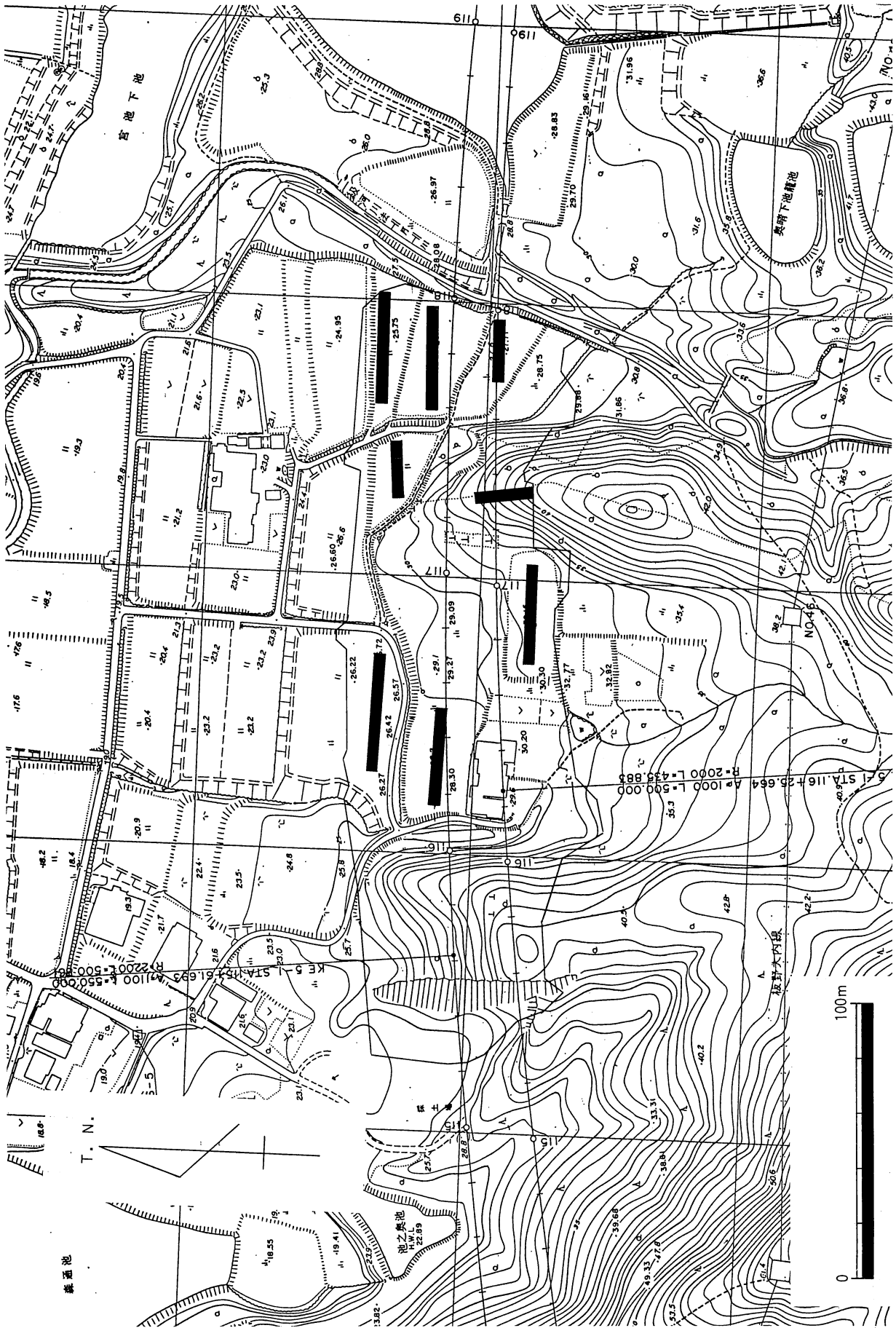
第8図 原間遺跡(西丘陵)予備調査トレンチ配置図 (1/1,000)



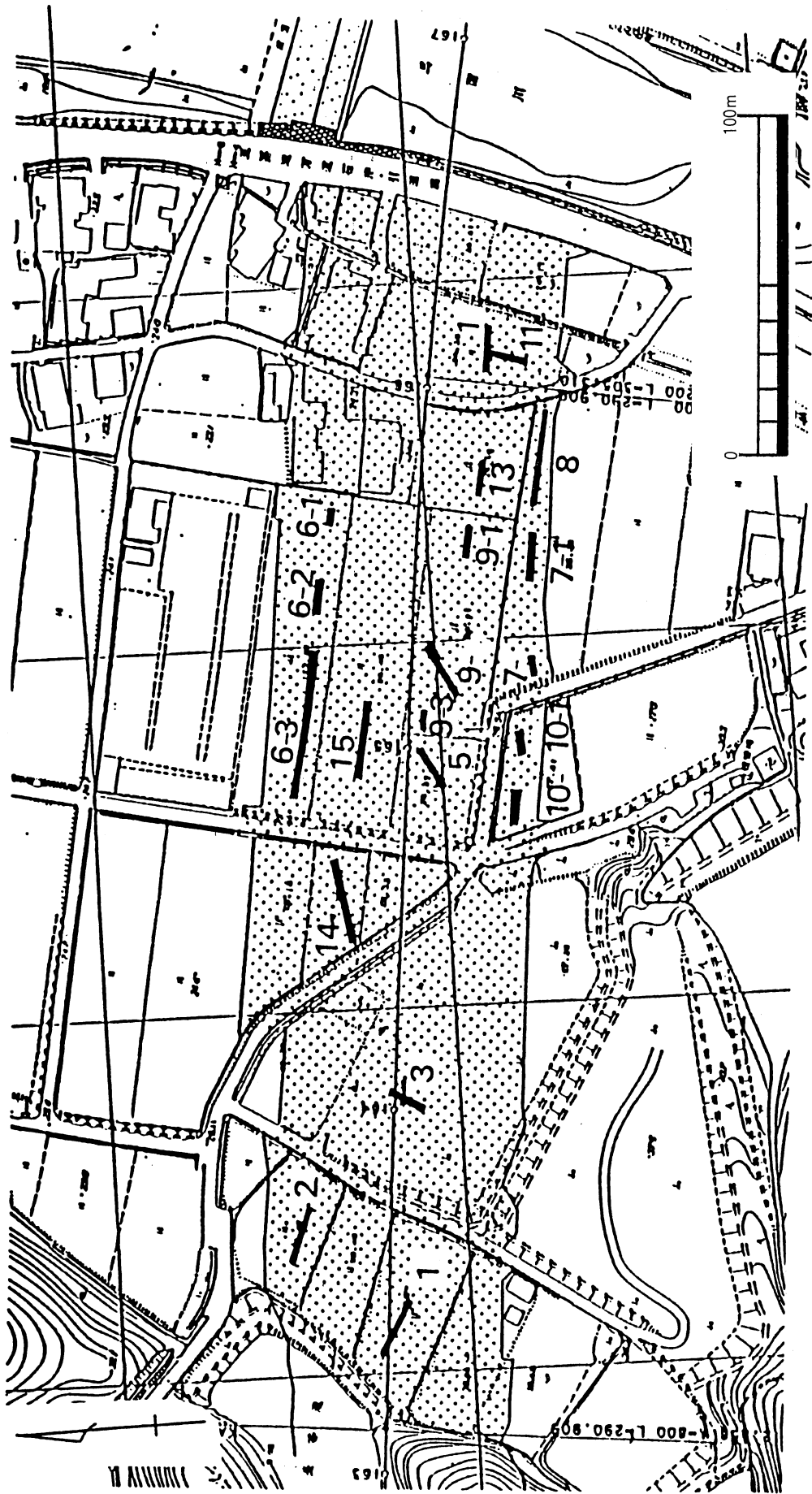
第9図 原間遺跡予備調査トレンチ配置図



第10図 池の奥地区予備調査トレンチ配置図



第11図 法月地区予備調査トレンチ配置図



第12図 鹿庭地区予備調査トレンチ配置図 (1/3,000)





第13図 黒羽地区予備調査トレンチ配置図 (1/3,000)



## 第2章 調査の概要

### 上天神遺跡

#### 1. 立地と環境

上天神遺跡は、高松市上天神町に所在し、高松平野のほぼ中央部に位置している。概ね旧香東川が石清尾山塊の南麓にぶつかって東方へ大きく蛇行する部分の東岸にあたり、巨視的には比較的安定した微高地上に立地するといえる。しかし、当該地は古川が北流していたり、埋没河川に起因する微起伏が認められ、いくつかの微高地に分けることができる。

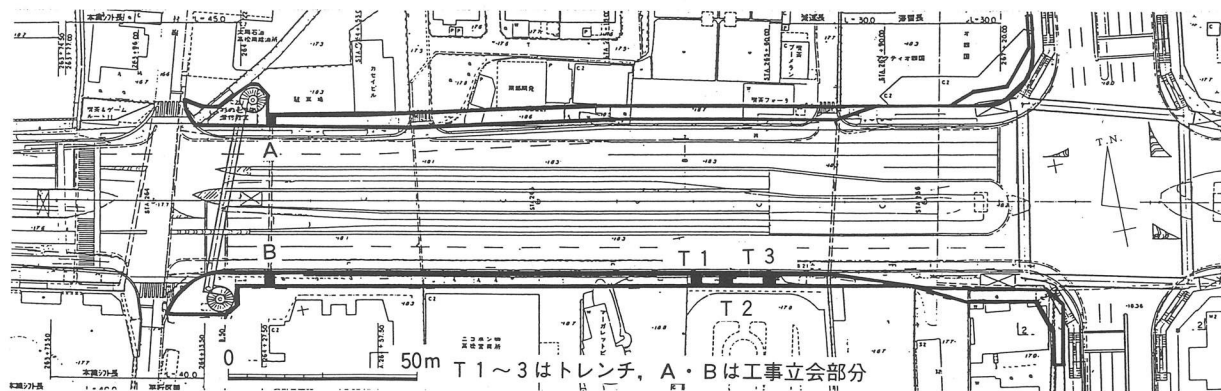
周辺の遺跡としては、東方に隣接して、鹿の線刻を持った壺を含む弥生時代後期の土器群や古墳時代の竪穴住居を検出した大田下・須川遺跡が存在する。北西に位置する石清尾山塊上には積石塚の古墳群で著名な石清尾山古墳群が位置している。また、当該地周辺は都市化に伴う開発が進んでいるものの、条里制の名残をとどめる方格地割が比較的良好に遺存している所でもある。

上天神遺跡は、国道11号バイパスの高松東道路の建設に伴って、昭和62年度から平成4年度にかけて断続的に調査を行っている。その結果、弥生時代後期前半を中心とした集落遺跡であることが判明している。上天神遺跡で出土した弥生後期前半の土器群は高松平野の当該期の土器編年上の基準資料となり、また、集落内では朱の精製が行われていた可能性が指摘できるといった重要な成果をあげているなど、高松平野の弥生時代後期を語る上では看過することのできない貴重な遺跡であるといえよう。

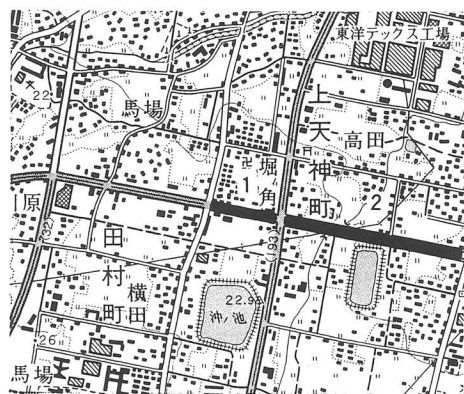
#### 2. 調査の成果

今回の調査は、四国横断自動車道（高松市内区間）の建設予定地の発掘調査で、調査対象地は既調査部分の西側に隣接している。立地としては、弥生時代後期の集落が存在した微高地とは古川によって分離された微高地あたるものと思われる。現況では、開発が進んでかなりの高上げがなされ、宅地や店舗が密集している。

調査は、平成9年8月1日から9月30日までの2ヶ月の期間で、対象面積500m<sup>2</sup>ということで着手す



第15図 遺跡トレンチ配置図



1. 上天神遺跡 (今年度) 2. 既調査区

第14図 遺跡の位置 (S=1/25,000)

る予定であった。しかし、用地取得の遅れや工事工程との調整などの諸々の事情により、実際には面積190㎡を対象として実施した。調査対象地は幅2.5～4.0mと狭く、嵩上げ部分は遺構面までの掘り下げの深度が比較的深いことが予想された。そのため、国道施工以前の地表に近い部分はトレンチ調査、店舗などの嵩上げ部分は工事立会の2つの手法を組み合わせる調査を行った。トレンチ調査は、(株)高松自動車学校の二輪教習コース北側で平成9年8月26日に行い、工事立会は同自動車学校駐車場前(第15図B)を同年9月8日に、カセイビル前(第15図A)を同月28日にそれぞれ実施している。

トレンチ調査は、表土層の除去から遺構・遺物を確認するまでを重機にて掘り下げ、確認後には人力で掘り下げる方法で行った。

トレンチ1 二輪教習コースの設置に伴う造成土の下には、国道施工以前の水田耕作土と床土があり、その床土直下で古代～中世と思われる微量の須恵器片を含んだ土坑状の遺物包含層がみられた。この包含層のベースである暗茶褐色粘土は北西方向に向かって分厚く堆積しており、溝の埋土になっている。この層からは弥生時代後期前半の甕・壺・鉢などの土器が出土した。土器は全て胎土中に雲母と角閃石を多量に含んだいわゆる下川津B類土器である。溝の底が北西に傾斜していることからすると、この溝の方向は南西―北東方向が想定できよう。なお、この溝の直下には高松平野一円でみられる安定した地山層である黄白色粘土が存在している。

トレンチ2 造成土の下には、遺物を全く含まない比較的粒の粗めの砂層が分厚く堆積しており、現地表から約2m下で湧水がみられた。この砂層は小規模な流路の可能性がある。遺構は確認していない。

トレンチ3 トレンチ1と同様、造成土の下に水田耕作土と床土がみられるが、その直下には地山層である濁黄灰色粘土がみられる。その下には高松平野の基盤層である灰色砂礫が存在する。後世に上部を削平されたらしく、遺構・遺物は確認していない。

工事立会部分 工事立会を行った2カ所はいずれも上天神遺跡の西端にあたり、国道の造成土の直下に分厚く堆積した黄灰色の細砂から中砂層を確認した。この砂層中にはラミナー層が散在しており、旧河道の中に堆積した洪水砂層のようなものと思われる。遺物は確認していないため、この砂層の堆積時期は不明である。なお、この砂層の直下には灰色砂礫層を確認している。

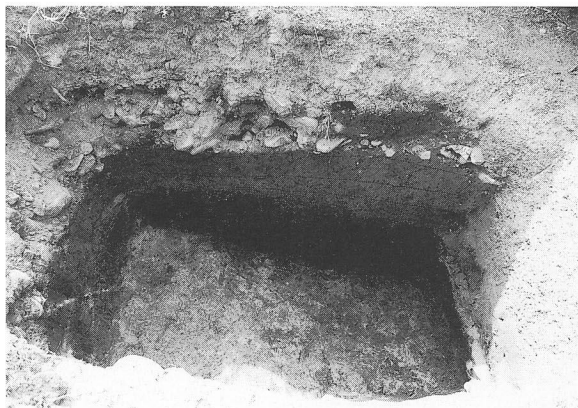


写真1 トレンチ1全景(東より)



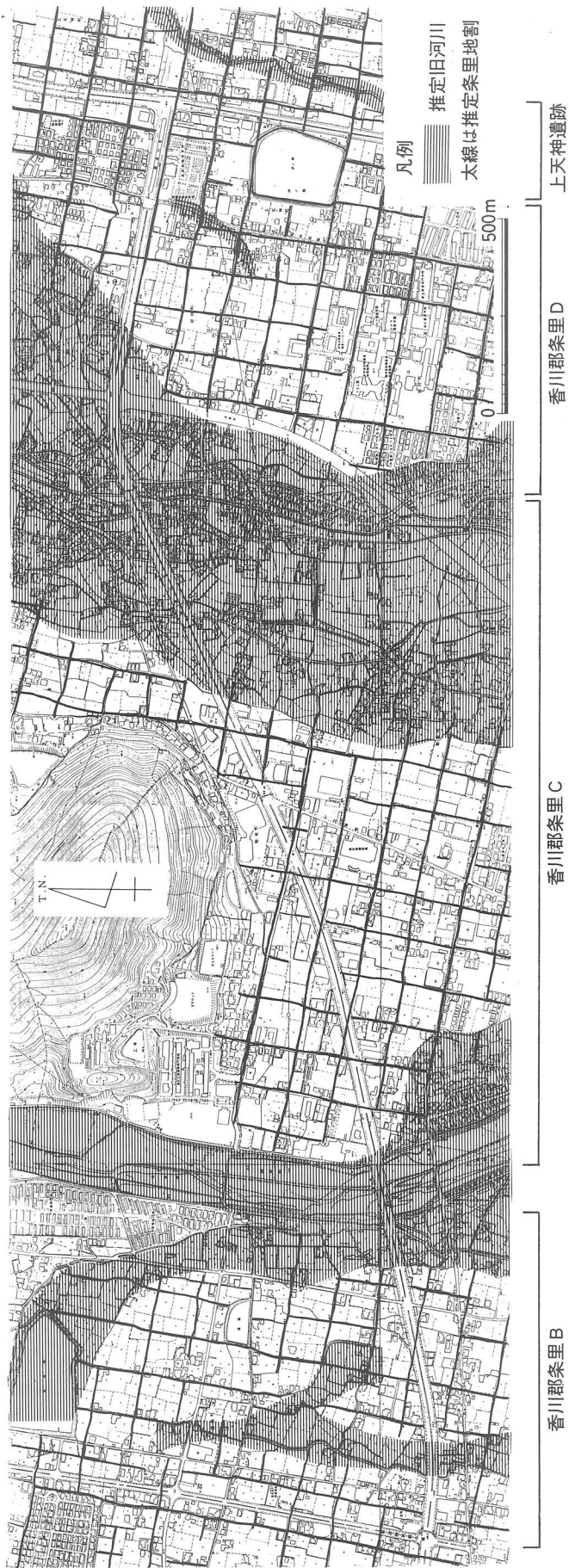
写真2 トレンチ3全景(西より)

### 3. 旧地形の復原

上天神遺跡の周辺及び高松平野には条里制の名残をとどめる方格地割が遺存していることは、先述した。今回の調査区以東については、高松東道路に伴う発掘調査が数多くなされており、既に刊行された報告書などにおいて旧地形の復原などの詳細な検討がなされているが、以西については行われているとは言い難い。そこで今後の開発などに備えて、上天神遺跡から香東川付近までの国道11号線沿線を中心に、旧地形の復原を試みた。

まず、高松市の都市計画図上に、現在みられる河川や方格地割などを書き込み、さらに地形の乱れなどから旧地形を復原して、微高地と低地などの分類を行った。さらにその推測に基づいて現地での踏査を行い、その確認および修正を行うという方法をとった。

上記の方法による調査の結果、上天神遺跡以西の香東川付近までの範囲を巨視的に概観した場合、地形としては巨大な2本の河川（現・旧香東川）とそれらの両側に位置する微高地群という区分をすることができる。このうち2つの河川に関しては、その巨大な規模から考えて、度重なる大きな開析と氾濫・堆積作用を繰り返してきたことが推測されることから、この部分は遺構の存在する可能性は低いと言えよう。とはいうものの、水田等の生産域として土地利用された可能性は十分にある。一方、微高地部分に関しては、現在も条里制の名残である方格地割が部分的には失われているとはいえ、明瞭に残されていることなどから、条里に関わる遺構の存在は容易に推定できる。さらにこれらの微高地は居住域として適していることから、古墳時代以前の集落遺構などの存在も推定できよう。また、これらの微高地は現地表に現れていないような小規模な埋没河川によってさらに細かく区切られるものと思われる。このような小規模な河川は、比較的人の手によって制御しやすい（言い換えれば治水が容易）ものであることから、護岸や堰など人為的に手を加えられているものの存在することであろう。また、居住域に隣接する場合は廃棄場所として使われる例も知られていることから、土器や生活残滓などの多数の遺物を含むものも存在すると思われる。



第16図 上天神遺跡周辺の旧地形復原想定図

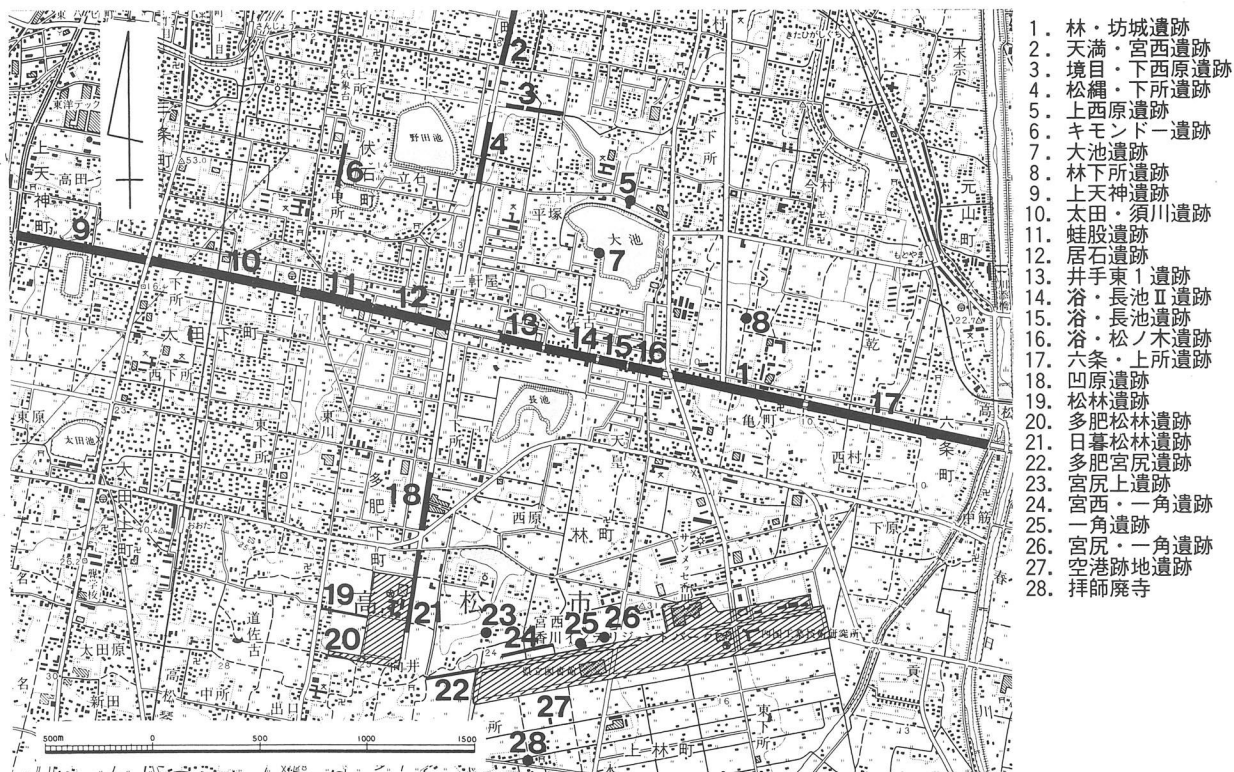
# 林・坊城遺跡

## 1. 立地と環境

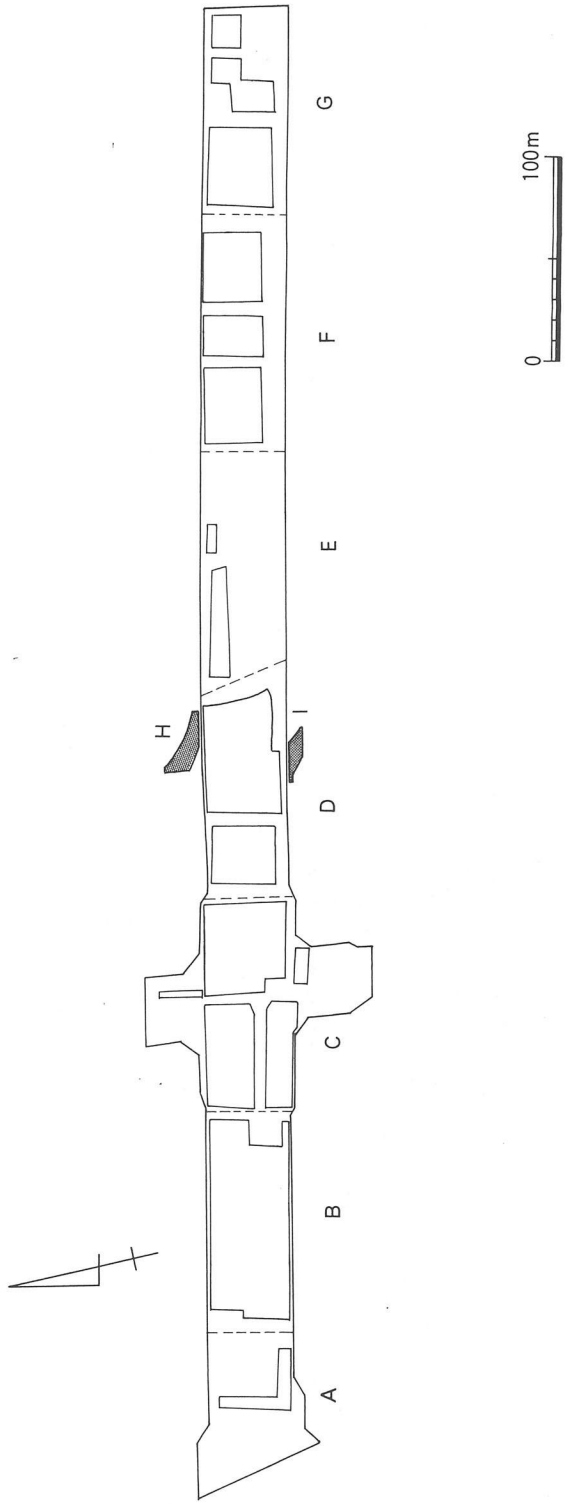
高松平野は、香川県のほぼ中央部に位置し、北を瀬戸内海に面し、東の立石山地、西の五色台へと続く山地、南の讃岐山脈に囲まれた平野であり、高松市林町に所在する林・坊城遺跡は、その平野のほぼ中央に位置する。そしてこの平野のうち春日川より東は、讃岐山脈から北流する香東川の堆積によるできたものであり、標高約96mの香川町川東の西部付近を扇頂として北に扇状地が広がり、その扇端は紫雲山・浄願寺山のふもとにまで達する。標高約10mの林・坊城遺跡は、この扇状地のほぼ扇端に位置しており、太田下町の鹿の井出水をはじめとして数多くの出水がある。

今でこそ香東川は紫雲山の西側を流れているが、江戸時代に西嶋八兵衛が河川工事を行う以前は紫雲山の西側（おおよそ今の御坊川）も流れており、その支流がこの林・坊城遺跡をはじめとして居石遺跡や浴・松ノ木遺跡・多肥松林遺跡などを流れていた。そのため多くの旧河道や水田跡や住居跡が確認されている。

時代をおって見ていくと、旧石器時代では有舌尖頭器が大池遺跡において採集されている。縄文時代では、当遺跡の前の調査において多量の晩期末の突帯文土器とともに木製農耕具が出土している。弥生時代前期では、環濠が検出された天満・宮西遺跡があり、井出東Ⅰ遺跡や上西原遺跡では前期と考えられる水田跡が検出されている。中期の遺跡としては、浴・長池Ⅱ遺跡や鋤などの農具に交じり中細形銅剣を模倣した剣形木製品を出土した多肥松林遺跡などがある。後期に入ると遺跡数は増加し、上天神遺跡や、凹原遺跡・日暮松林遺跡では竪穴住居を検出している。また周溝状遺構も検出されており当遺跡では陸橋部を持ったもの、空港跡地遺跡では円形・方形・前方後方形のものが確認されている。古墳



第17図 周辺遺跡地図 (S = 1/35,000)



第18図 調査区割図



時代の遺跡としては白山神社古墳があり，天満・宮西遺跡や凹原遺跡では集落遺構が検出されている。古代の遺跡としては，松縄・下所遺跡で幹線道路状遺構が検出されており，高松平野の条里制施行との関わりが考えられる。また天平7年に描かれた「弘福寺領讃岐国山田郡田図」の比定地が当遺跡の西方一帯にあると考えられており，宮尻上遺跡では山田郡香川郡堺線にほぼ一致する郡界畦畔が検出されている。中世・近世には平野部へ集落が営まれており，キモンドー遺跡では16世紀後半の逆L字状を呈する堀跡も確認されている。

## 2. 調査の成果

今回の林・坊城遺跡の調査はインターチェンジ建設のうち，現状保存される緑地帯部を除き，本線に連なるループ状道路予定地で実施した。

また，林・坊城遺跡は昭和63年度に高松東道路建設に伴う調査を行っている（註1）。前回の調査はA～Gまでの調査区に分けて行なった。今回の調査対象地はD地区の南北にあたる部分で，それぞれをH・I地区として調査した（第18図）。

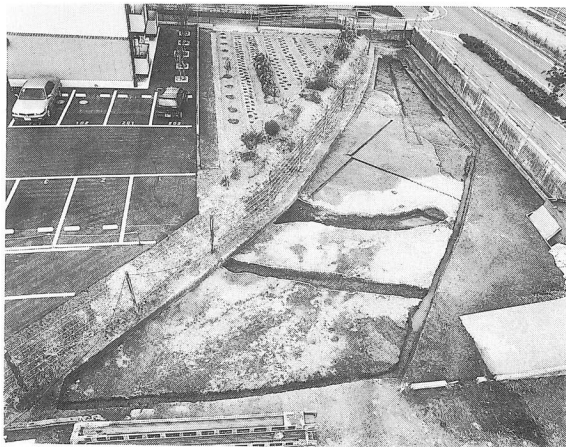


写真3 H地区全景（西から）

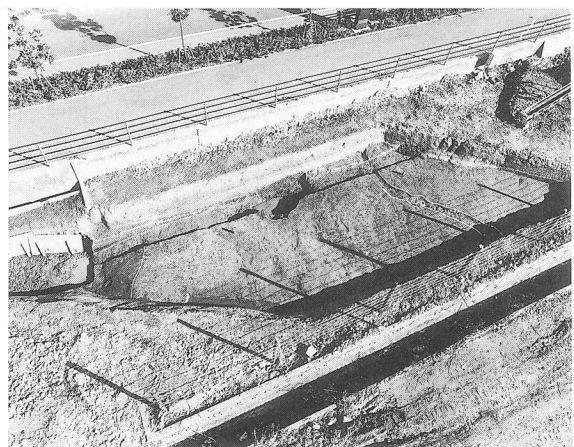
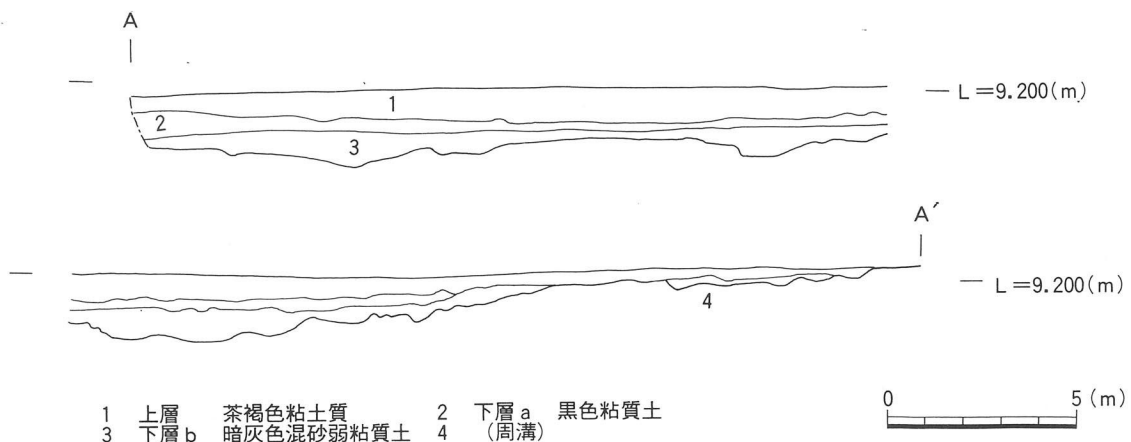
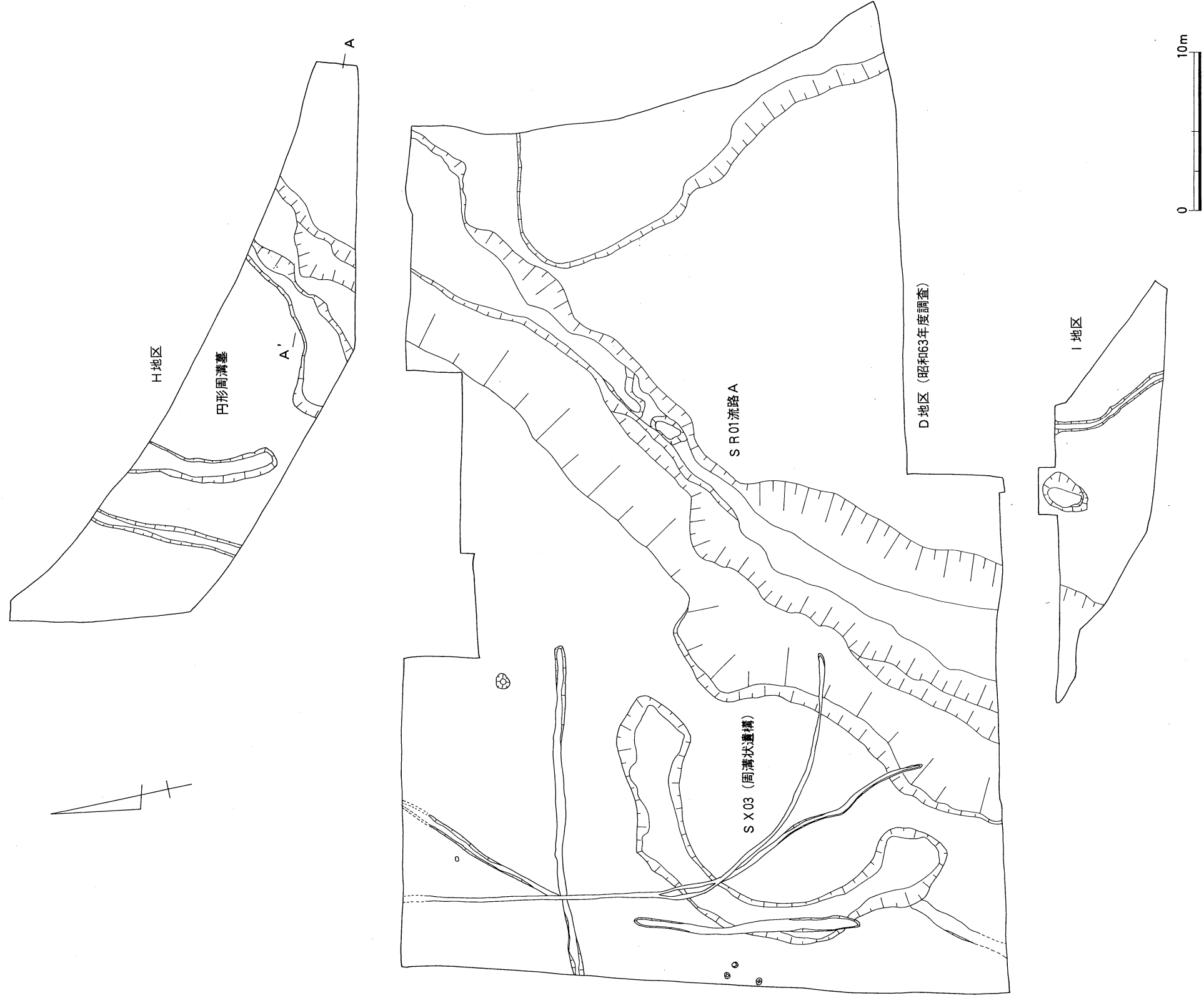


写真4 I地区全景（南から）



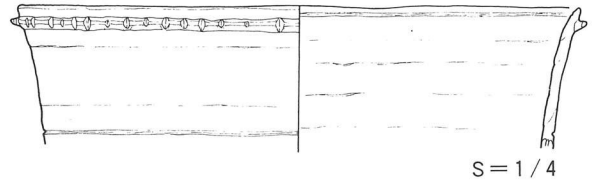


第20図 D・H・I地区遺構配置図



S R01流路A下層b

S R01流路AはH・I両地区にまたがり、南西から北東に向かって流下する。前回の調査でS R01流路Aの土層は上層・中層・下層・最下層の4つに大別できることを確認したが、今回の調査では最下層は認められなかった。ただ、下層は明確に2層に分かれることが判明し、それぞれを下層a・下層bとした。そのうち下層bからは流路の底部に貼りつくような状態で、縄文時代晩期後半の土器が出土した。



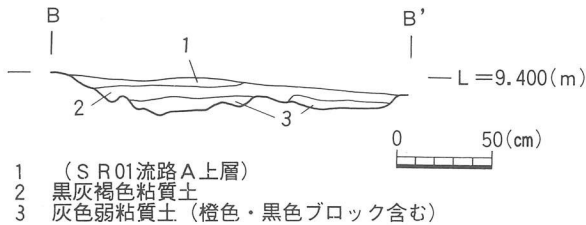
第21図 S R01流路A下層b出土遺物

弥生時代

円形周溝墓

全体形の約半分であるが、陸橋部をもつ円形周溝墓をH地区において検出した。ただし、後世の激しい削平を受けており、主体部等の埋葬施設は検出できなかった。周溝を含めた直径は約17m、墳丘部分の直径は約12mである。陸橋部は、確認している部分で長さ約1.6m、幅約3mを測る。周溝の埋土には数種類の土をブロック状に含むものがあり、この土は墳丘からの流土であると考えられる。また、この円形周溝墓はS R01上層以前に形成されていることが土層の観察により確認できた。

周溝から出土した土器より弥生時代後期前半に築造されたと考えられる。

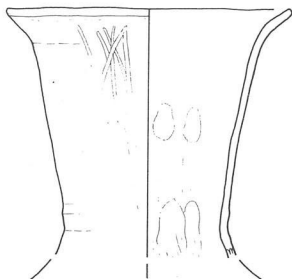


- 1 (S R01流路A上層)
- 2 黒灰褐色粘質土
- 3 灰色弱粘質土 (橙色・黒色ブロック含む)

第22図 円形周溝墓周溝土層断面図



写真5 円形周溝墓遺物出土状況 (西より)



S=1/4

第23図 円形周溝墓出土遺物



写真6 壺型土器出土状況 (西より)

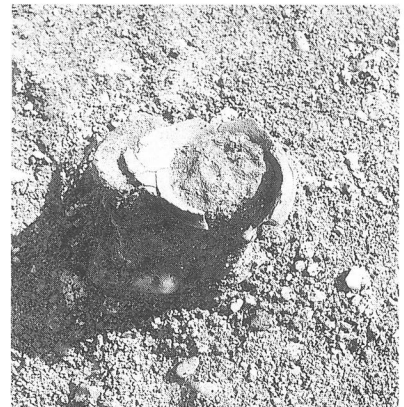
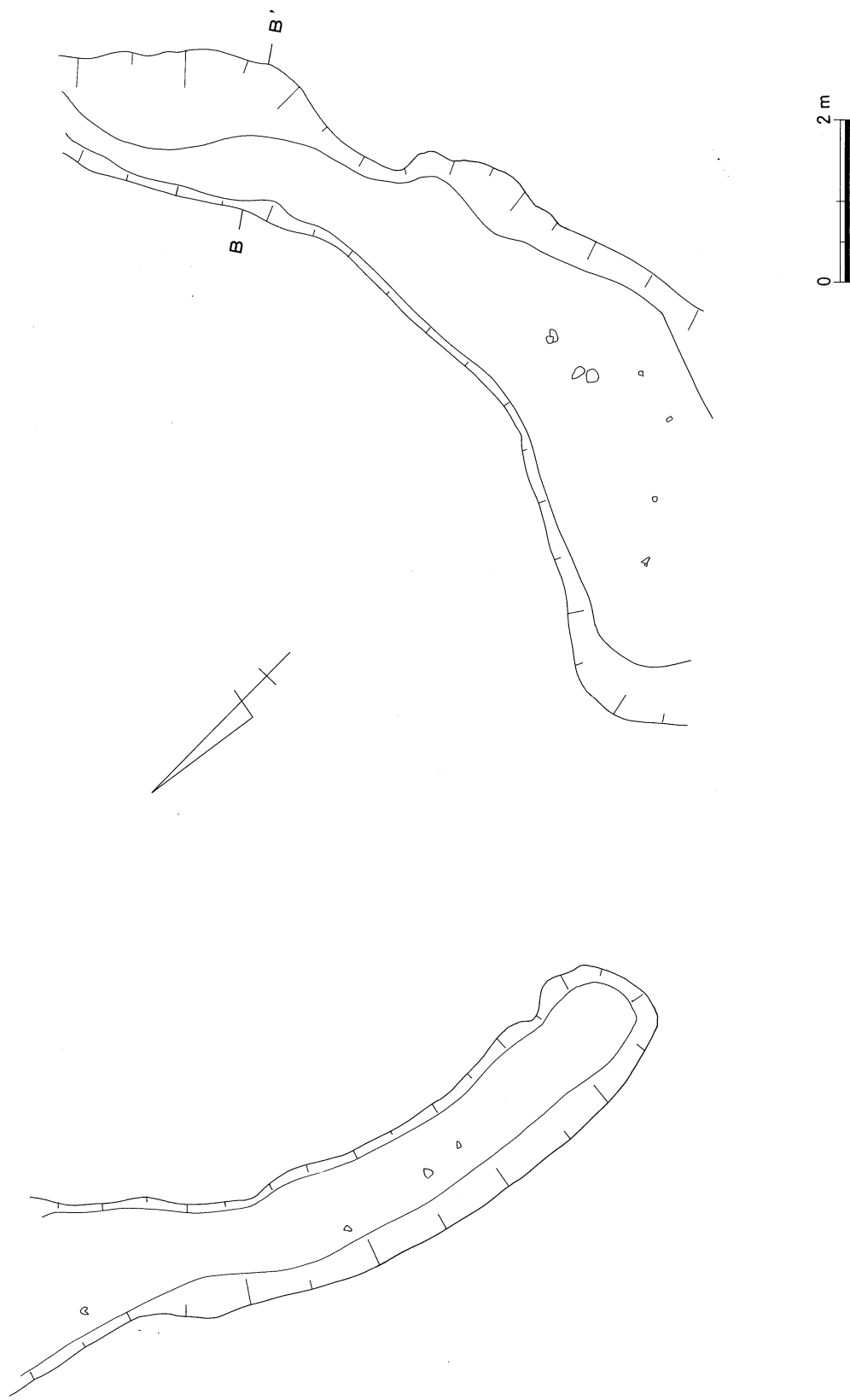


写真7 甕型土器出土状況 (西より)



第24图 凹形周溝墓平面图

### 3. まとめ

前回、林・坊城遺跡の調査ではS R01流路Aから多量の縄文時代晩期後半の土器と木製農具が出土した。しかし、今回の調査では縄文時代晩期後半の土器の出土は数点に留まり、木製農具は出土しなかった。また、S R01流路A最下層の存在も確認できなかった。これにより、前回の調査によって得られた、縄文時代晩期後半の資料は、流路の底部の落ち込み状の部分に集中して溜まっていたと考えられ、流路出土の資料としては、一括性が高いと推測できる。

D地区で検出した周溝状遺構（S X03）について、前回の調査の報告では円形周溝墓の可能性を提示した。今回の調査において、H地区でS X03に類似する遺構を検出し、この遺構を円形周溝墓の一部であると考えた。その理由として、第1に、S R01上層の下で周溝の東部の一部を平面で確認したこと、第2に、東部の周溝の埋土に、墳丘の盛土の流土と考えられる土を確認したことである。

この周溝墓の周溝からは、多くの遺物は出土していないものの、弥生土器数個体より周溝墓の時期を弥生時代後期前半に比定することが可能で、D地区のS X03とほぼ同じ時期を示す。また、S X03を円形周溝墓と仮定するならば、H地区の周溝墓の北半部の形状も、南半部と同様、陸橋部を持つことが推測できる。そして、S R01に平行するように主軸を揃えて列をなすと考えられる。

S X03も含めて、この陸橋部を持つ円形周溝墓は、当地域のこの時期の墓制を考える上で重要な資料である。

(註) 1 宮崎哲治1993『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2集 林・坊城遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センター

## 前田東・中村遺跡

### 1. 立地と環境

前田東・中村遺跡は、高松平野の東辺部にあたる高松市前田東町の、東へなだらかに上る丘陵辺縁部に位置する遺跡である。標高は20m前後で、北方の前田山、南方の芳尾山などの低い山に挟まれ、東方へ緩傾斜の地形が、三木町の雲附山まで続く。西方に目を転じると高松平野を一望することができるなど見晴らしのよい低丘陵地帯である。遺跡の周辺にも住宅地・田園が広がりそれを分断するように、高松東道路が東西に走る。また四国横断自動車道の橋脚工事も進行中である。



- |            |              |               |              |            |
|------------|--------------|---------------|--------------|------------|
| 1. 大空遺跡    | 2. 南谷遺跡      | 3. 長尾古墳群      | 4. 小山谷墳      | 5. 山下古墳    |
| 6. 山下廃寺    | 7. 岡山古墳群     | 8. 久本古墳       | 9. 諏訪神社古墳    | 10. 久米山遺跡  |
| 11. 久米池遺跡群 | 12. 高松茶臼山古墳  | 13. 前田城址      | 14. 滝本神社古墳   | 15. 金石山古墳群 |
| 16. 平尾古墳群  | 17. 平尾小古墳群   | 18. 宝寿寺廃寺     | 19. 前田東・中村遺跡 | 20. 西浦谷遺跡  |
| 21. 権八原古墳群 | 22. 池戸八幡社古墳群 | 23. 香川大学農学部遺跡 | 24. 始覚寺廃寺    |            |

第25図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (S = 1/50,000)

本遺跡の周辺には、旧石器時代から古代・中世に至るまでの数多くの遺跡が点在あるいは密集する。

旧石器時代の遺跡として、久米池南遺跡から旧石器時代のナイフ形石器、すでに調査を終了した前田東・中村遺跡（高松東道路部分）からは船底形石器や横長剥片が確認されている。

縄文時代の遺跡では、前田東・中村遺跡（高松東道路部分）から後期～晩期の土器が出土している。

弥生時代に入ると、諏訪神社遺跡から、前期の環濠状の溝が検出され、中期後半の竪穴住居跡・掘立柱建物、鉄製工具などが確認されている。その他、久米山遺跡群からは中期後半の壺棺・甕棺・箱式石棺墓・木棺墓が見ついている。また後期初頭の集落跡と考えられる西浦谷遺跡では、竪穴住居跡や段状遺構などが検出されている。それ以外では、弥生後期後半の製塩土器が確認された大空遺跡、南谷遺跡、後期末から古墳時代初頭のものと思われる墳丘墓が確認された権八原古墳群、諏訪神社遺跡がある。

古墳時代前期には、竪穴式石室を2基もち、画文帯神獸鏡・碧玉製鍬形石・鉄製武器等が出土した高松茶臼山古墳をはじめとする古墳がある。古墳時代後期になると、前田山の西側に久本古墳、小山古墳、山下古墳がある。久本古墳は両袖の横穴式石室をもち、奥壁には県下唯一の作り付けの石棚を持っている。さらに、土師質の亀甲形陶棺や承台付銅椀等の遺物をもっている。3基とも大型の横穴式石室をもち、この地の首長墓と考えられている。その他に、長尾古墳群、岡山古墳群、平面形がT字形をする特異な横穴式石室を持つ瀧本神社古墳、金石山古墳群、平尾古墳群、平尾小古墳群などが点在する。

古代になると、周辺には寺院が造営され、山下廃寺や、6個の礎石を残す宝寿寺廃寺などがあり、出土遺物の年代等からも本遺跡周辺は寺院との関連が色濃く残されている地域である。さらに本遺跡一帯は、「和妙抄」にも記される山田郡内の宮処郷の一つであり、東大寺の封戸が置かれていた。このことは「造東大寺司牒」にも記されている。前田東・中村遺跡（高松東道路部分）でも総柱構造を含んだ掘立柱建物からなる集落を確認している。また、本遺跡の南約800mには推定南海道が通っている。

中世に入ると、本遺跡の北西の低丘陵上に前田城が築かれる。集落の一部が前田東・中村遺跡（高松東道路部分）でも確認されており、本遺跡の周囲に残る条里制の名残の方格地割も、この頃のものとして推定されている。

## 2. 調査の成果

調査対象地は、四国横断自動車道の高松東インターチェンジ部分で、国道11号線高松東道路の両側にまたがっている。今年度は調査対象面積約13,000㎡のうち4,040㎡について、平成9年10月1日から平成10年3月31日までの予定で調査を行っている。調査は平成9年12月1日から着手した1班を加えた、直営方式の2班体制であたっている。調査区の設定は、以前の調査との整合性を考えて既調査部分の調査区割を踏襲することとし、調査区の番号も連続させた。したがって、高松東道路の北側部分を西からH～K区、南側部分をL～O区とし、さらに水田などの地割で小区画を設定している。今年度の調査区はI区・J区の一部とL区・M区である。

調査対象地を地形的にみると、尾根状の低丘陵とその裾部の低地部からなり、今年度の調査区で言えば、L区は低丘陵上でI・J・M区は低地部に相当している。まだ調査の途中ではあるが、1月までの成果としては、丘陵上のL区で古代～中世の掘立柱建物や溝や多数の柱穴等を、低地部のI・J・M区では古墳時代初頭の自然河川とその埋没後に築かれた古代～中世の掘立柱建物や溝、井戸等を検出した。

以下、調査区ごとに現段階での調査の概要を述べる。

(1) I①区

東道路北側で調査対象地のほぼ中央に位置する調査区である。本来は北東から南西方向にかけて緩やかに傾斜していた地形らしく、水田開墾時に段状に削られている。三角形の調査区の西端付近は耕作土下の近世遺物をわずかに含んだ黄灰色粘質土の直下の遺構面1面だけであるが、東半は黄灰色粘質土直下に1面とその下の淡灰褐色砂質土直下に1面の計2面の遺構面を確認した。上位の遺構面では平安時代を中心とした古代から中世にかけての溝2条(SD01・02)と井戸1基(SE01),柱穴などがある。下位の遺構面では、弥生時代後期の土坑(SK01)と古墳時代初頭の土器を含んだ自然河川(SR01)がある。

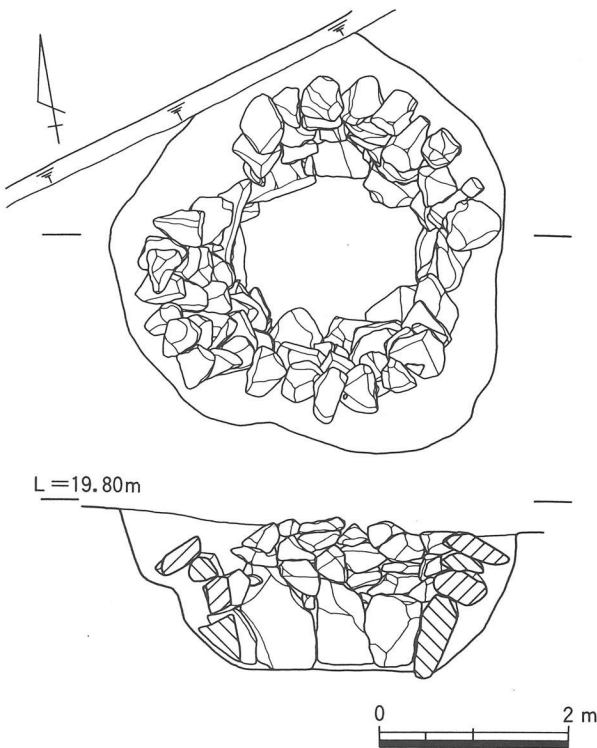
SD01・02 SD01は南北の方向を持ち、幅約6.0m、深さ約0.5mを測る規模の大きな溝である。埋土からは須恵器や土師器などの破片が多量に出土している。既調査区で検出している西にほぼ直角に方向を変えている溝と連続するものと思われる。SD02は東西の方向を持ち、幅約2.0m、深さ約0.2mを測る。溝の底は断面形態がW字状をしており、上部の削平が著しいために部分的には2条の平行する溝



写真8 I①区SD・SE全景(南より)

に見える部分もある。埋土からは多量の須恵器や土師器などの破片と共に平瓦片や獣の歯などが出土している。SD02は西端でSD01と合流しており、いずれもが本遺跡の周辺にみられる方格地割と方向を一にしている。

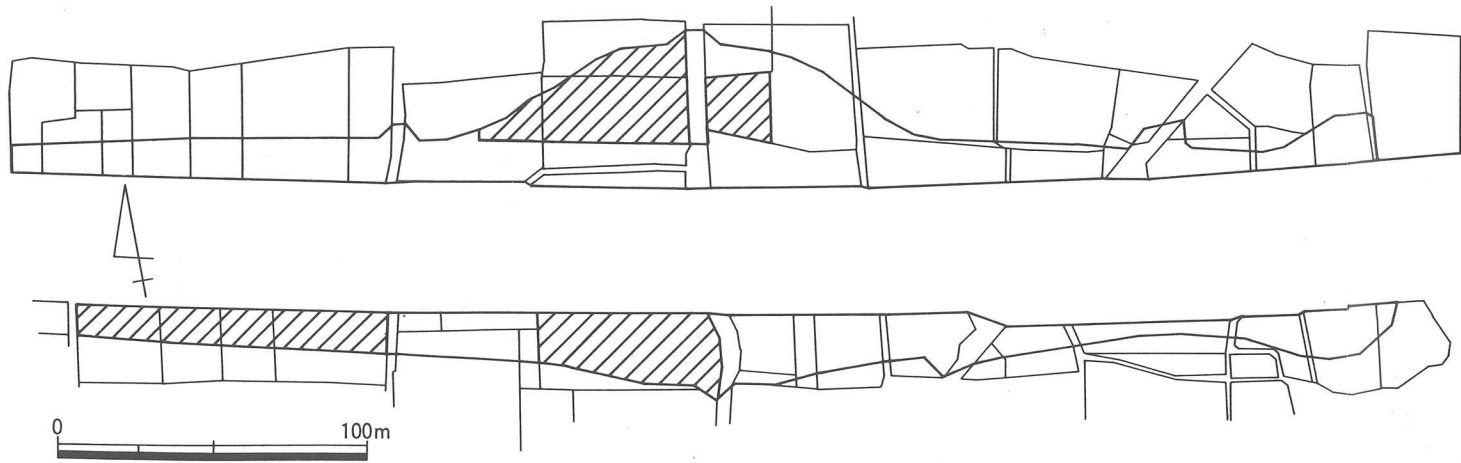
SE01 SD01が埋没した後に築かれた石組みの井戸である。不整円形を呈する直径4.0mの掘り方の中に、直径2.0m、高さ1.6mの石積み壁面を築いている。石材は基底部に大振りな石材を用いて、その上からは人頭大の石材を使っている。掘り方内からの遺物の出土はないが、井戸の内部から出土した土器には陶磁器が一切含まれていないことや、出土土器の年代観から中世前半頃の築造が想定される。



第26図 I①区SE01平・断面図

I①区の上位遺構面で検出した溝は、周囲の方格地割と同一の方向をもつことから、古代の段階で方格地割が作られていたことが推測される。また、SD02から出土している瓦は、既調査区や本遺跡北方の宝寿寺廃寺でも出土しており、宝寿寺廃寺との関連の有無が注目される。今年度中に調査を予定しているI②区でも、SD02の続きが存在することが予想され、更なる資料の蓄積や遺構の全体像の把握に期待がかかる。また、自然河川のSR01からは完形に近い土器群が出土していることから、近辺に古墳時代初頭頃の住居などが予想される。





第27図 調査区割図

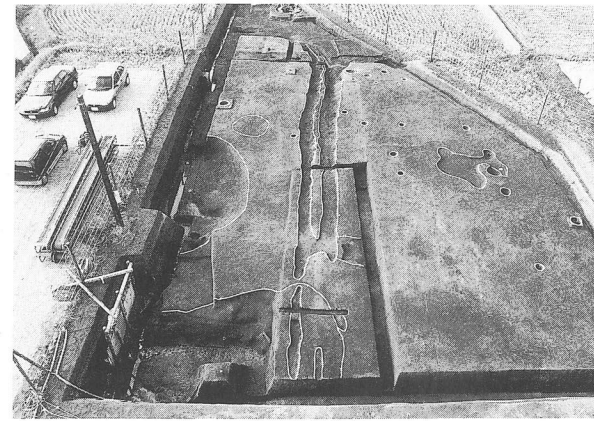
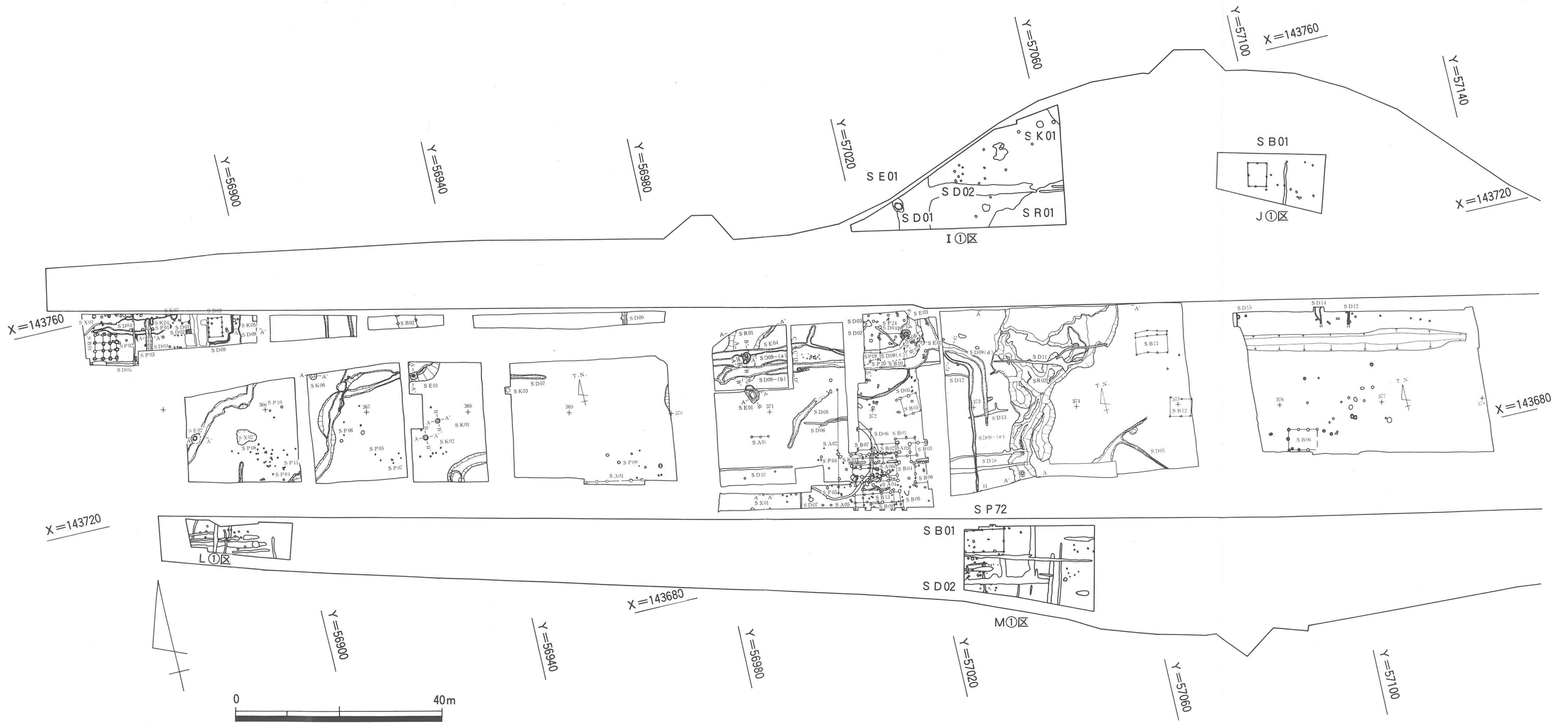


写真9 I①区全景（東より）



写真10 I①区SR01遺物出土状況（西より）



第28図 遺構配置図

(2) J①区

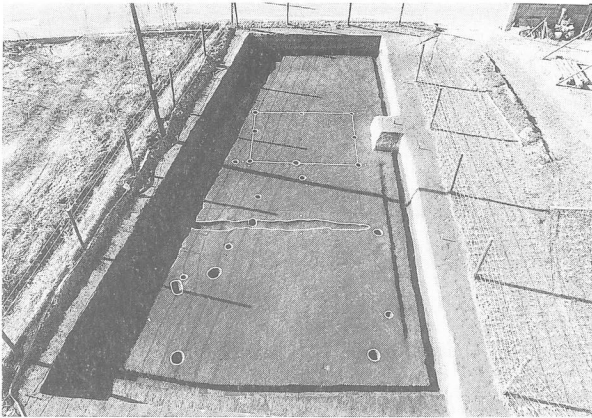
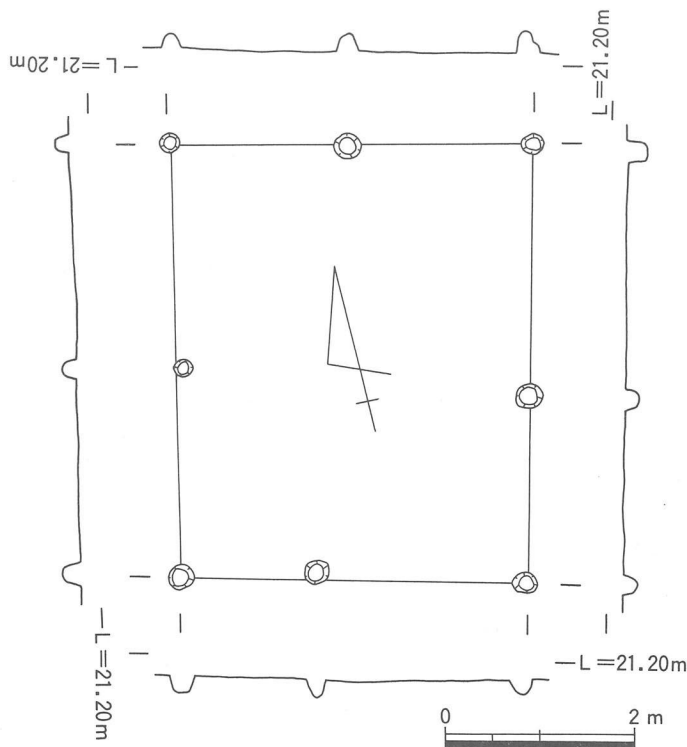


写真11 J①全景 (東より)



第29図 J①区 S B01平・断面図

高松東道路の北側で、I区の東に隣接する調査区である。J区は南北方向に比高差約1m程の段が設けられているが、J①区は高い側にあたる。基本層序はI①区と類似しており、耕作土の直下に近世の希薄な包含層である黄灰色粘質土がみられ、その下に淡灰褐色砂質土が堆積している。しかし、遺構面は淡灰褐色砂質土直下の1面だけである。調査後に重機で約2.0m程掘り下げたところ、薄い黒色粘質土層をはさんで青灰色シルト層が分厚く堆積していることを確認した。この層は低丘陵間の低地全体に

堆積しているシルト層で、I①区の古墳時代初頭頃の自然河川は低地全体の埋没過程の最終段階に近いものであると判断できる。既調査区では縄文時代後期の自然河川も確認されていることから、遺物は出土していないもののそれ以前の堆積であると思われる。J①区で検出した遺構は掘立柱建物1棟と柱穴数基、溝1条がある。

S B01 J①区のほぼ中央で検出した南北棟の掘立柱建物である。2間×2間の建物であるが、南北が4.6m、東西が3.8mで南北に長い長方形を呈している。南辺中央の柱穴が西に寄っており、これが別のものであれば調査区外へ続く可能性がある。柱穴は平面が円形を呈し直径30cm前後のものである。建物の主軸方向はN13°Eで、概ね遺跡周囲の地割の方向と一致している。

J①区で検出した掘立柱建物は集落の一端を示すものというよりは、水田などの生産域の傍らに建てられたような農作業小屋のような性格の建物と考えられる。地形的にみても、当該期に集落が立地するほど安定したとは思われず、水のつきやすい水田などの生産域に適した土地であったと思われる。

(3) L①区

高松東道路の南側で、最も西の調査区である。コンクリート塊を含んだ攪乱層の下に耕作土がみられ、その下の黄灰色粘質土の直下が遺構面となっている。現段階では地割に平行・直交した数条の溝と柱穴数基を確認しただけであり、遺物や遺構の時期は確認できていないが、黄灰色粘質土の土器から概ね中世頃の年代が予想される。



#### (4) M①区

M区は高松東道路の南側に位置し、高松東道路調査時のC区の南側に位置する。高松東道路C区を調査した際には集落跡等は検出されなかったが、南北方向の自然河川が検出されており、縄文時代後期から奈良時代までの遺物が出土したほか、古墳時代前期の木製品が多量に出土した。今回の調査でもその自然河川の延長部分が検出されることが予想された。

調査は西側半分をM①区、東半分をM②区とし、M①区から調査を行っている。

M①区においては調査区の南東部では表土から約50cmで比較的安定した黄色粘土のベースがみられ、同様のベースは調査区北西隅でも表土から約80cmで見られる。これらの黄色粘土のベースに挟まれた部分が概ね高松東道路調査区C区で検出した自然河川にあたる。今年度の調査ではこの自然河川の上面で遺構を検出した。以下で報告する遺構は自然河川の上面で検出したものである。

なお、自然河川については12月末現在未調査であり、今回の概報では上層遺構のみとしたい。

#### 室町時代

SD02 M①区の西半部で検出した溝である。北から南へ向き、南端で西へ屈曲する。また、屈曲点から5.6m西へ寄った部分でも南北方向の溝が延長約4.8m取り付く。溝の幅はおおむね1mであるが、屈曲部付近では幅約1.2mへやや拡がり、溝断面の形状も他の部分が皿状であるのに対し、屈曲部付近では中央付近で1度盛り上がり、溝の断面形では2条に分かれたような形状を示す。深さは概ね16cm、埋土は灰色粗砂混粘土である。溝の埋土中からは土師質土器杯、土釜などが出土しており、15世紀代のものと考えられる。

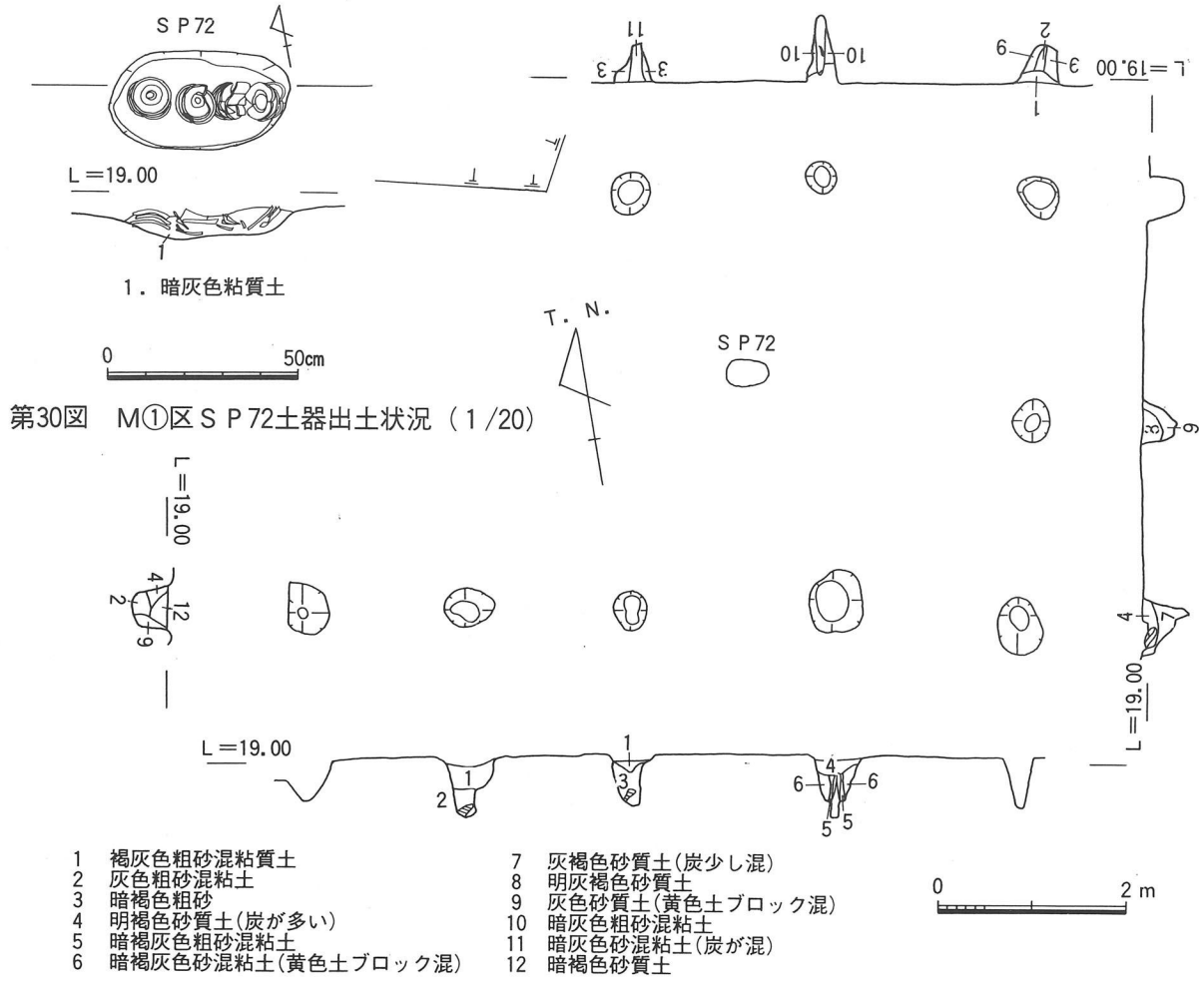
SB01 SD02に囲まれた部分で検出した。2間×4間以上で、西側は調査区外へ延びると思われる。桁行は8m以上で柱間は1.84～2.16m、梁間は4.6mで、柱間は2.24～2.4m、柱穴は円形で直径40～50cm、深さ40～70cmである。主軸方位はN78°Wで、SD02および周辺の条里型地割の方向とほぼ同じである。面積は36.8m<sup>2</sup>以上である。柱穴のうち3穴には柱材が遺存していた。また、1穴から皇宋通宝が出土した。

SB01の内側にあたる位置でSP72を検出した。楕円形で長径41cm、短径26cm、深さ5cmで、埋土は暗灰色砂質土である。このピットの埋土中から土師器杯が折り重なって出土した。土器は東西方向に長いピット中に4列に並び、それぞれ西から4枚、6枚、4枚、3枚が上向きに重ねられていた。その他にもSB01の北西に近接するSP39からも土師器杯の完形品が下を向いて1点出土した。これらはSB01の地鎮のためのものである可能性がある。

### 3. まとめ

今回の調査では、高松東道路調査時には、あまりみとめられなかった中世後半の遺構群を検出することができた。これらは、L字に屈曲する溝の内側に掘立柱建物と、その地鎮のためのものと考えられるピットをもつ。しかし、隣接する高松東道路を調査した際にはこれらに関連する遺構は検出されず、集落は北へは拡がらないようである。

SD02で、囲まれた部分は、縄文時代後期から奈良時代の遺物が出土する自然河川のほぼ中心部にあたる。何故地盤の比較的良好な場所ではなく、悪い場所に宅地が営まれたかも今後の検討課題であろう。



第31図 M①区 S B 01平・断面図 (1/80)

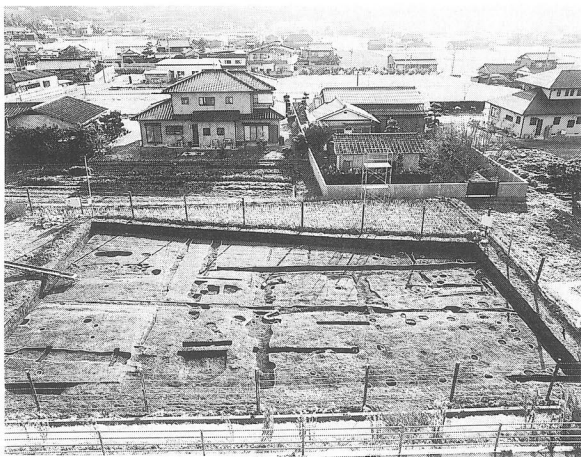


写真12 M①区上層遺構全景(北より)



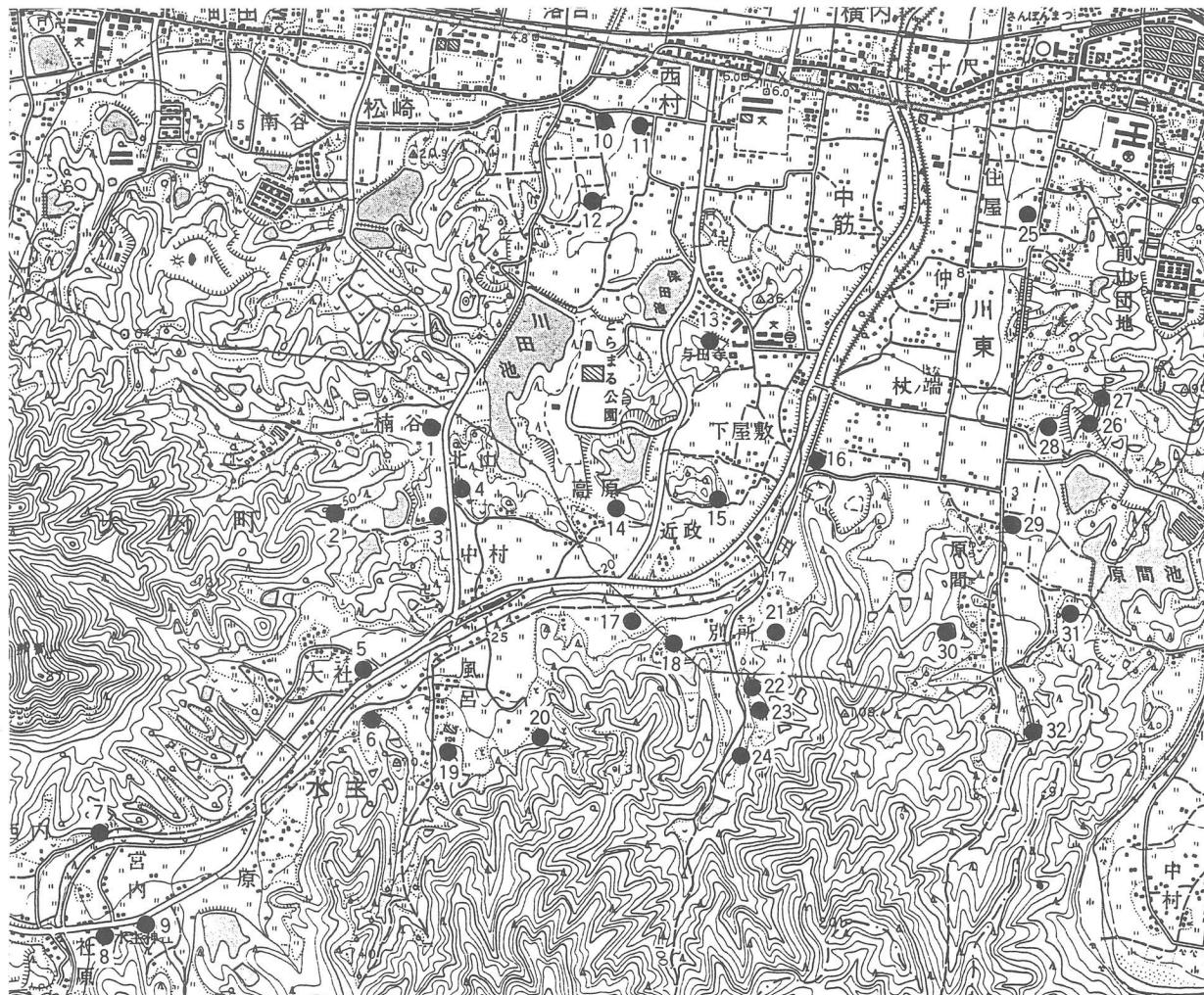
写真13 M①区 S P 72土器出土状況(南より)

# 楠谷遺跡

## 1. 立地と環境

楠谷遺跡は大川郡大内町水主楠谷5178-1外に所在する。地形的には、西方から延びる標高271mを最高点とする那智山の尾根に挟まれた谷筋に立地し、標高は約22mを測る。遺跡の北東方向の谷筋の出口をせき止めて川田池が築造されており、満々と水をたたえている。

本遺跡の周辺には、弥生時代から古墳時代を中心とした遺跡が、広範囲に分布している。まず明治末期から昭和初年にかけて当遺跡の南、水主大社の与田川の河原で後期旧石器時代のものと思われる遺物が採集されている。与田川のさらに上流には、弥生から古墳時代にかけての遺跡である水主神社遺跡があり、現在の水主神社を中心とする地域から様々な遺物が採集されている。そのほか、飛谷遺跡、別所遺跡、城ノ内遺跡、風呂遺跡、さらには近年四国横断自動車道建設に伴い調査が行われてきた住屋遺跡、



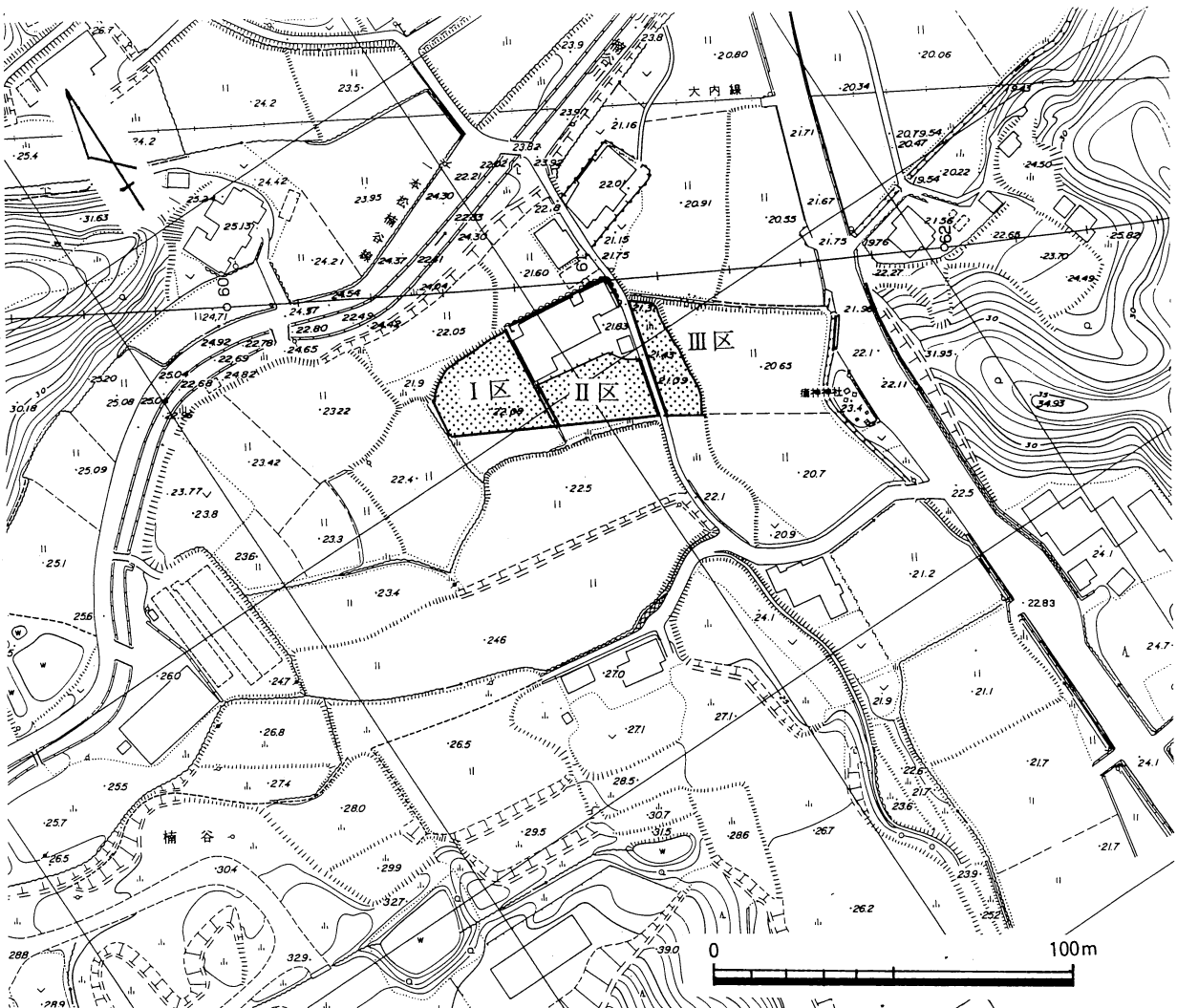
- |          |           |           |           |
|----------|-----------|-----------|-----------|
| 1 楠谷遺跡   | 9 百襲姫陵    | 18 城ノ内遺跡  | 26 大日山1号墳 |
| 2 楠谷古墳   | 11 西村古墳   | 19 岩瀬庵古墳  | 27 大日山2号墳 |
| 3 仲善寺遺跡  | 12 落合遺跡   | 20 風呂遺跡   | 28 大日山3号墳 |
| 4 北山遺跡   | 13 与田寺山古墳 | 21 別所池田遺跡 | 29 原間遺跡   |
| 5 大社遺跡   | 14 高原遺跡   | 22 別所古墳   | 30 原間1号墳  |
| 6 尾長山遺跡  | 15 金毘羅山遺跡 | 23 別所遺跡   | 31 原間2号墳  |
| 7 西内遺跡   | 16 杖ノ端遺跡  | 24 飛谷遺跡   | 32 幸代池西遺跡 |
| 8 水主神社遺跡 | 17 笠塚遺跡   | 25 住屋遺跡   |           |

第32図 遺跡の位置及び周辺の遺跡 (1/25,000)

原間遺跡など、与田川とその支流には弥生時代後期に開けた集落と比定できる遺跡が多い。大内町内の古墳としては、当遺跡の東方向に県下で最も東に位置する前方後円墳である大日山古墳、横穴式石室を有する原間古墳があり、当遺跡の周辺にも岩瀬庵古墳、百襲姫古墳、楠谷古墳等が確認されている。中世から近世にかけての資料はきわめて微量であり、大内町内では、わずかに水主神社遺跡に遺物の報告がある。

## 2. 調査の成果

調査地は、県道中村落合線沿いの谷筋の水田で、発掘調査面積1,500m<sup>2</sup>について発掘調査を実施した。調査区は、各水田区画ごとに西からⅠ区・Ⅱ区・Ⅲ区と設定した。予備調査の結果、Ⅰ区の北部から調査区のⅡ・Ⅲ区の北側にかけて洪水砂が確認され、現在は調査区の北方を流れている楠谷川の主流路・氾濫源であったと考えられる。Ⅰ区東南部からⅡ区西部にかけて舌状に尾根の先端部がのび、包含層が広がり、その下で遺構が検出できた。



第33図 調査区配置図 (1/2,000)

### 弥生時代

SB01 Ⅱ区西部からⅠ区にかけて検出した。2間 (2.6m) × 2間 (2.0m), 面積5.2m<sup>2</sup>で、主軸方向N 8° Eである。暗渠で、柱穴が1つ以上壊されている可能性があり、総柱建物の可能性も考えられ

る。柱穴掘形平面は、楕円形あるいは隅丸方形で、断面は逆台形状で、径0.6m前後、深さ0.3~0.4mである。柱穴埋土からは、土器の細片しか出土しておらず、これだけでの時期決定は難しいが、S D01やS D02と同時期のものと考えられる。

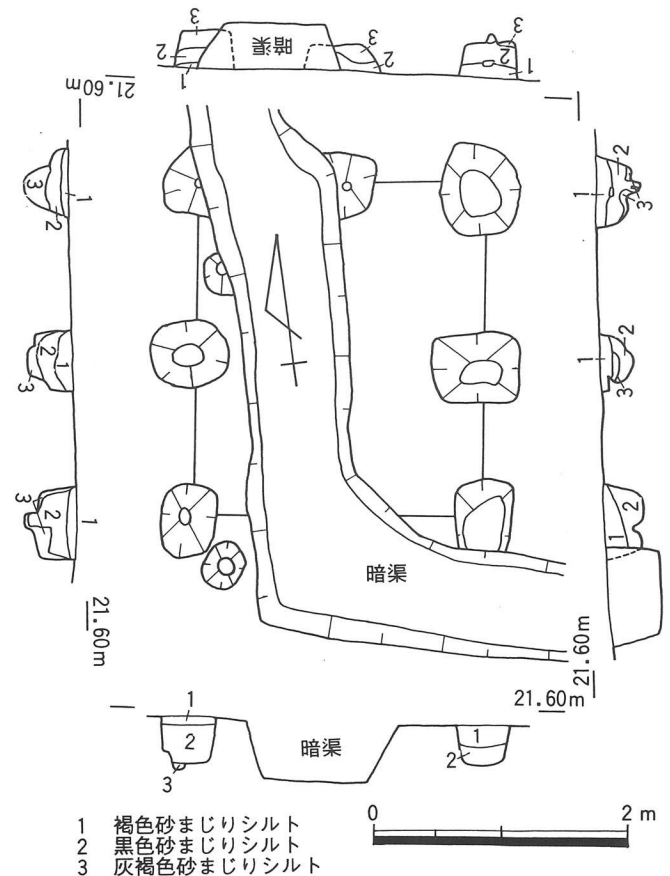
S D01 II区西部からI区東部にかけてS B01の北側を南から舌状に張り出している尾根の先端部を横切るかたちで、北西方向に流れていたと考えられる溝である。延長13.5m、幅1m~0.5m、深さ0.4mあまりで底はU字形をしている。埋土は、上下2層に分けることができ、上層に多くの土器を含んでいた。時期は、弥生時代後期後半から古墳時代初頭にあたるものと考えられる。

S D02 I区東部で検出した溝で、I区南壁の南の調査区外から始まりS B01の西部を接するようにはほぼ南から北へ向かって流れ、S D01と合流していたと考えられる。検出長7m、幅0.5m、深さ0.2mあまりでS D01より浅く、埋土は1層であった。時期は、S D01と同様弥生時代後期後半から古墳時代初頭にあたるものと考えられる。

S R01 III区の中央部で検出した南西から北東方向に流れていたと考えられる旧河川跡。検出長12m最大幅2.4m、最も深いところで0.4mあまりであった。南西部では検出できず、北西部は調査区外へ伸びていたものと考えられる。埋土は、上下2層に分けることができ、上層により多くの土器を含んでいた。時期は、弥生時代後期後半から古墳時代初頭と考えられる。

## 近世

暗渠 II区で2本検出。1本は、中央部よりやや南よりを調査区の東壁からI区との境にむかっのび、そこからほぼ直角に北へむかい、北壁にぶつかり、調査区外へ続いていた。もう1本は、調査区の南東部で、東壁から南西へ向かい南壁から調査区外へ続いていた。II区の東壁では、2本の断面が確認されるが、III区の西壁では1本の断面しか確認できないことからII区とIII区の間で合流していたと考えられる。幅は、II区とI区の境を北に向かっている部分は0.4~0.6mあるが、他の部分は0.8mでは



第34図 S B01平・断面図 (1/60)

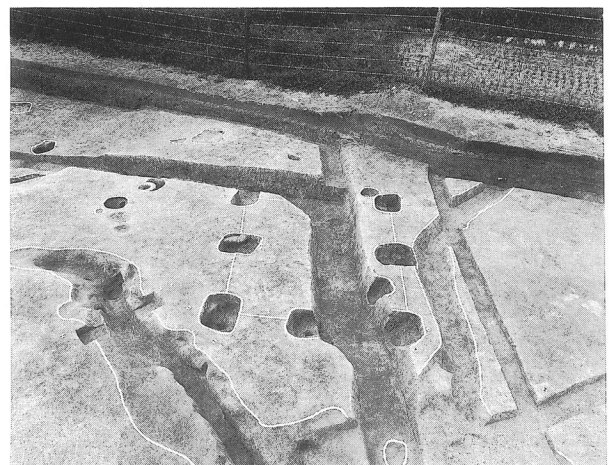
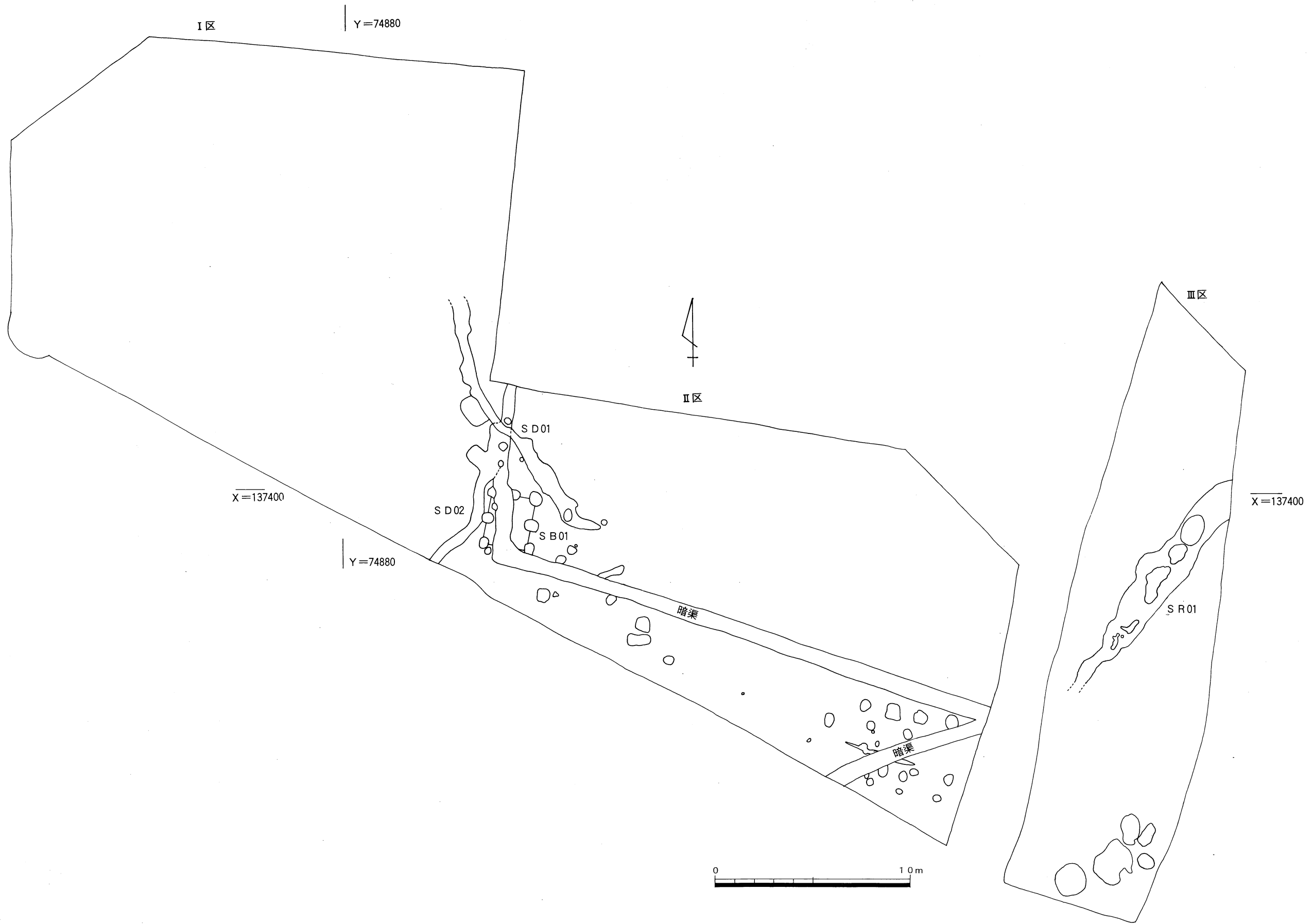


写真14 S B01全景 (北より)



第35図 遺構配置図



ば一定であり、深さは、0.4mをはかる。構造は、中央部の底の部分に、0.2m角程度の角張った石を使用し通水路が設けられていた。埋土より18世紀中から後半にかけての肥前焼の青磁染め付け碗が出土し、江戸時代の中頃には暗渠して機能していたと考えられる。現在の周辺の水田地形との相関関係は認められないことなどより、ほ場整備に伴って使用されなくなったと想定できる。



写真15 II区南壁部暗渠（北より）

### 3. まとめ

今回の調査では、弥生時代後期後半～古墳時代初期の掘立柱建物1棟とそれを囲むように溝2条が検出できた。このことにより、今回の調査区の南部に同時期の集落の存在の想定が可能である。しかしながら、今回の調査はあくまでも尾根の先端部分の調査のみで、この遺跡のくわしい全容が明らかにできたわけではない。

ただ、今回II区で検出した暗渠跡は、江戸時代の中頃から使用されていたものと考えられ、その当時の暗渠の構造を理解する上で良い資料といえる。



写真16 II区全景（西より）

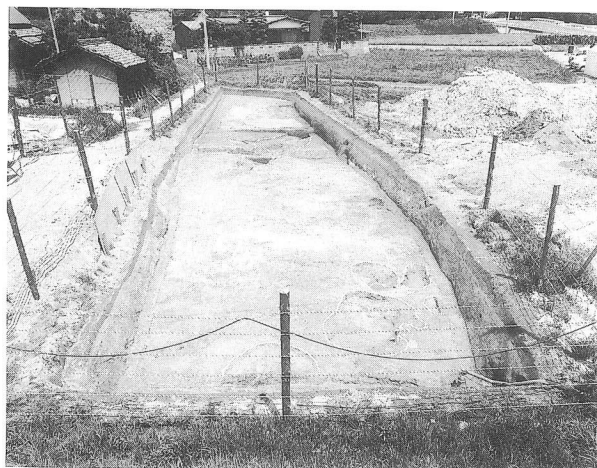


写真17 III区全景（南より）



# 西 谷 遺 跡

## 1. 立地と環境 (第36図)

### 地理的環境

西谷遺跡は、香川県東部の大内町に広がる平野の南東部、大内町川東1101番地外に所在する。阿讃山脈の分脈である矢筈山系の山裾部で、三方を丘陵に囲まれ、南に虎丸山、東に古川、西に与田川を臨む谷平野に位置する。現在の標高は18m前後である。調査時前の土地利用は水田であったが、昭和60年の圃場整備や暗渠排水設置による攪乱も予想された。



写真18 遺跡遠景 (北より、右後方虎丸山)

### 歴史的環境

当遺跡周辺はこれまでに発掘調査があまり行われていなかったこともあり、周辺の遺跡については不明な部分が多い。旧石器時代の遺構が検出された遺跡は現在のところない。与田川の河原で、サヌカイト製の有舌尖頭器やスクレイパーが数点採集されているのみである。

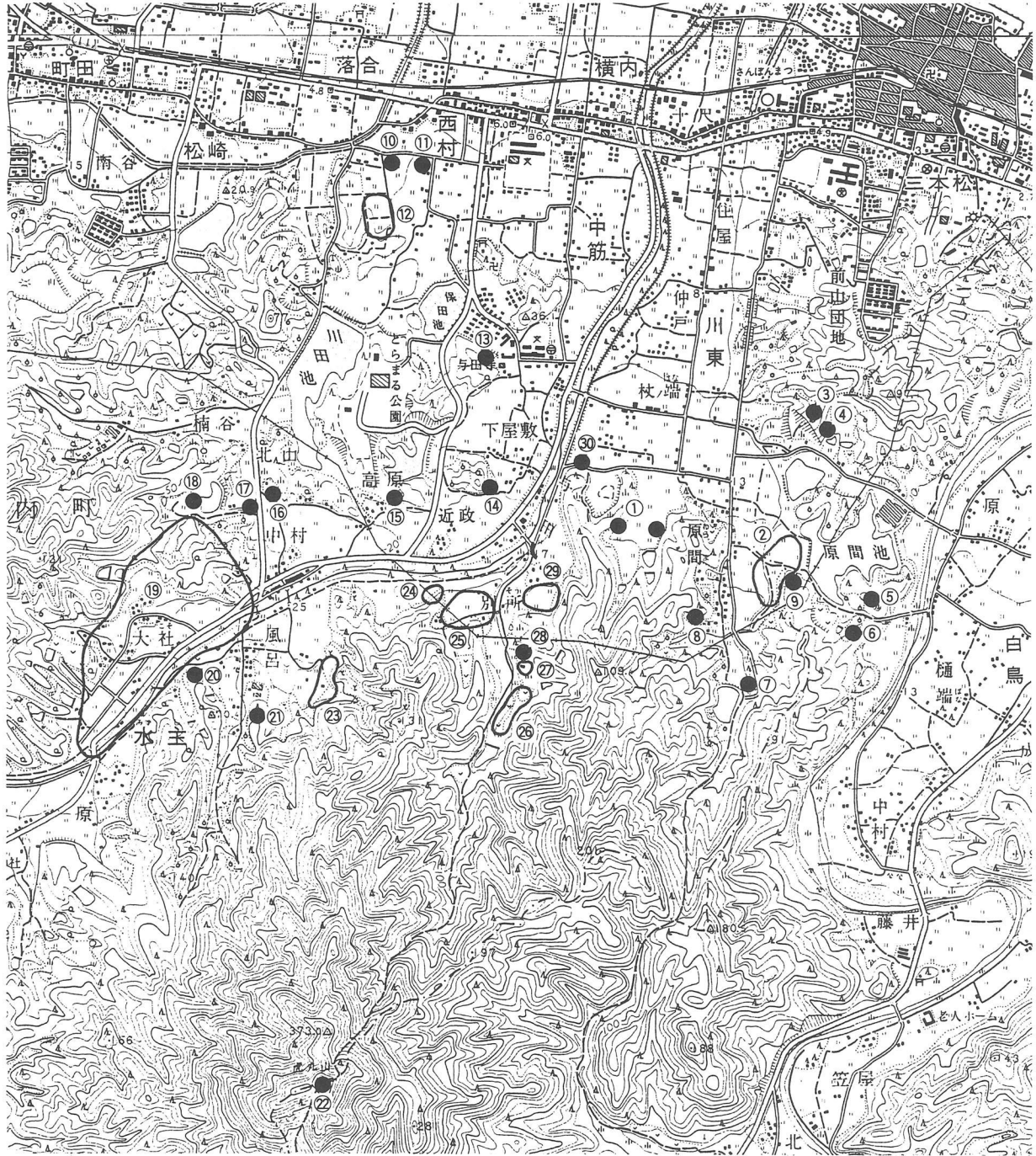
縄文時代の遺跡は確認されていないが、石斧や石鏃等の石器が与田川上流域で十数点発見されている。弥生時代前期の遺跡は落合遺跡がある。出土遺物の中には、刻み目のついた貼付突帯・篋描沈線を主体とした文様を施している等の特徴を有する弥生時代前期末土器がある。弥生時代中期の遺跡には、水主神社遺跡があり、後期の遺跡には、風呂遺跡、飛谷遺跡、別所遺跡等があり、比較的水利の便が良く、洪水を免れやすい微高地に集落が成立したと考えられる。

古墳時代の遺跡としては、大内町内で14基程確認されている古墳がある。古墳時代中期前半以前では当遺跡の北東に位置する大日山古墳がある。この古墳は、香川県最東端の前方後円墳で、その規模は全長38m、後円部径20mである。後円部の最高所で標高55.6mを計り、前方部は一部削平されており、形状には不明な点もあるが、くびれ部等の状況から推測すれば柄鏡状の前方後円墳であると考えられる。また、古墳の東西方向及び南にかけて眺望がきく立地条件から、被葬者は、原間や川東地区だけでなく、白鳥町の湊川水系をも統括した首長である可能性が高いと言われている。古墳時代後期のものとしては、当遺跡の東方の片袖式横穴式石室をもつ原間1号墳がある。

奈良～平安時代のものとしては、行基草創と伝えられる与田寺があるが、古瓦の出土もなく、建立の時期を決定する文献もないので、奈良時代建立を立証することは困難である。

中世では、戦国時代末期に長宗我部元親の攻撃に落ちなかった中世城、虎丸城跡が当遺跡南西の虎丸山頂にある。

近世以降では、江戸時代に築造されたとされる川田池、原間池等がある。また、武士や庶民に親しまれた療養施設の新宮・本宮・那智という3つの石風呂があった。(参考文献『大内町史』)



- |                    |                   |                   |
|--------------------|-------------------|-------------------|
| ① 西谷遺跡 (弥生~室町時代)   | ⑪ 西村古墳 (古墳時代)     | ⑳ 岩瀬庵古墳 (古墳時代)    |
| ② 原間遺跡 (弥生~平安時代)   | ⑫ 落合遺跡 (弥生時代)     | ㉑ 虎丸城跡 (室町時代)     |
| ③ 大日山1~3号古墳 (古墳時代) | ⑬ 与田寺山古墳 (古墳時代)   | ㉒ 風呂遺跡 (弥生時代)     |
| ④ 高松廃寺 (平安時代)      | ⑭ 金比羅山遺跡 (弥生時代)   | ㉓ 飛谷遺跡 (弥生時代)     |
| ⑤ 神越古墳 (古墳時代)      | ⑮ 高原遺跡 (弥生時代)     | ㉔ 城ノ内遺跡 (弥生~平安時代) |
| ⑥ 神越桃山古墳 (古墳時代)    | ⑯ 北山遺跡 (奈良時代)     | ㉕ 飛谷遺跡 (弥生時代)     |
| ⑦ 幸代池西遺跡 (弥生時代)    | ⑰ 仲善寺遺跡 (古墳時代)    | ㉖ 別所遺跡 (弥生時代)     |
| ⑧ 原間1号墳 (古墳時代)     | ⑱ 楠谷古墳 (古墳時代)     | ㉗ 別所古墳 (古墳時代)     |
| ⑨ 原間2号墳 (古墳時代)     | ⑲ 大社遺跡 (旧石器~弥生時代) | ㉘ 別所池田遺跡 (弥生~中世)  |
| ⑩ 清塚古墳 (古墳時代)      | ㉚ 長尾山遺跡 (古墳時代)    | ㉙ 杖の端遺跡 (古墳時代)    |

第36図 遺跡の位置及び周辺の遺跡

## 2. 予備調査結果と基本層序 (第37・38・39図)

### (1) 調査に至る経緯

本遺跡の北北西約250mの低丘陵先端部で、昭和51年度の大内町スポーツセンター建設に伴う町道拡幅工事の際、須恵器壺が不時発見され、杖の端遺跡として認定された。四国横断自動車道建設事業に先立ち、杖の端遺跡と地形的に連続し、遺構・遺物の存在が想定される谷平野部(8,000m<sup>2</sup>)及び東西の低丘陵部で埋蔵文化財発掘予備調査を行った。その結果、西側低丘陵麓の小平坦地で中世の包含層と同時期のピット群を、谷平野東部で



写真19 予備調査トレンチ2全景  
(南西より、手前下方SR01)

弥生時代後期の溝を検出し、地元住民の呼称する小地名を冠し、西谷(にっしやだに)遺跡I区135m<sup>2</sup>・II区818m<sup>2</sup>として本調査を開始することとなった。なお、II区本調査時点で中世ピット群を検出し、当初設定をII区a、拡張部346m<sup>2</sup>をII区bとして拡張調査を行い、II区本調査面積は1,164m<sup>2</sup>となった。

予備調査トレンチは、谷平野の旧地形及び堆積状況の把握に努めるため東西方向を主とし、第35図のTr1～9を設定した。当該地区では、昭和60年度に大規模な圃場整備事業が行われており、旧地形及び遺構・遺物の削平・損壊が懸念された。東西方向については圃場整備以前の耕作面造成時の、南北方向については圃場整備時の削平が少ないであろうと考えられる地点を狙ってトレンチを設定している。

Tr1で中世包含層とピット群を、Tr1及びTR2・8で南西部の開析谷より北東方向に流れる中近世の旧河道(SR01)を検出した。中世包含層とピット群の広がりを確認するため、Tr10を追加設定し掘削したところ、SR01が山裾部に及んでいることが判明し、I区本調査面積をSR01西肩部1m以西に限定した。

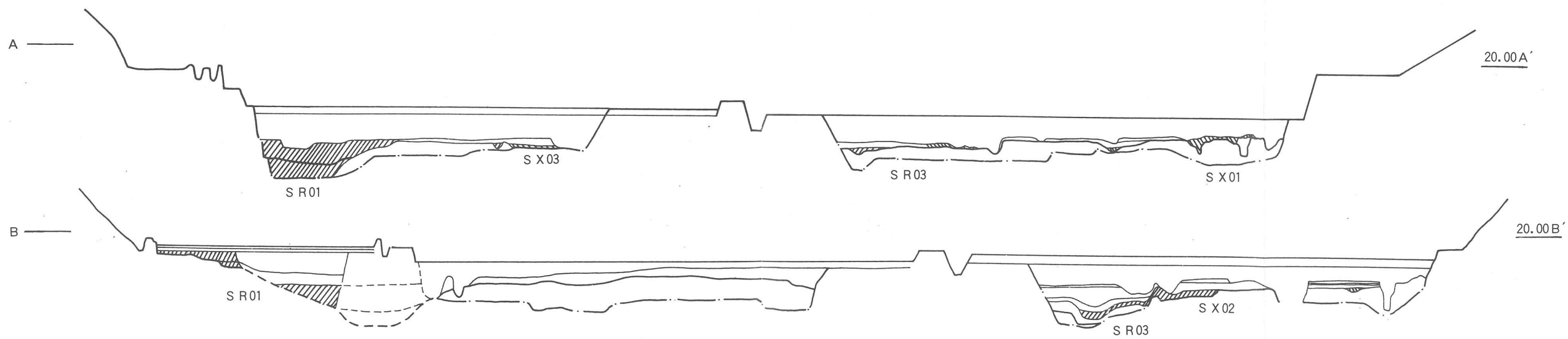
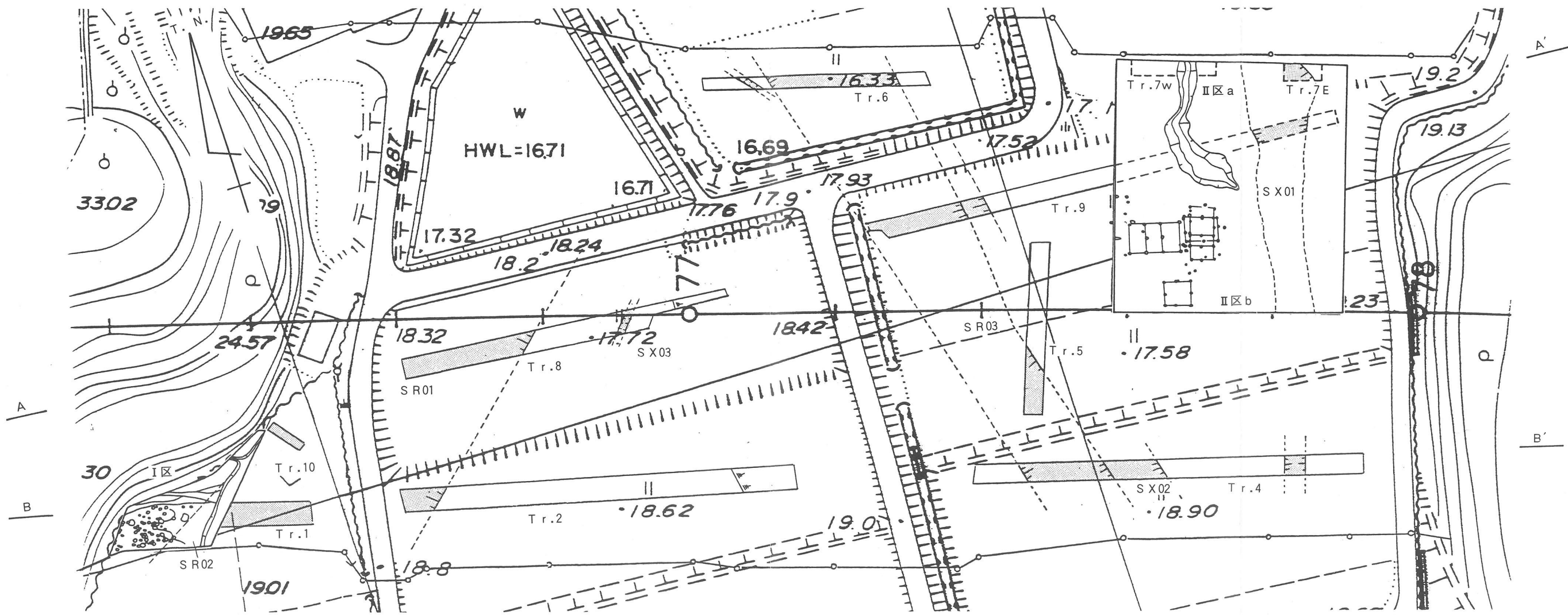
Tr7及びTr9では弥生時代後期の溝(SD03)を検出し、Tr9では時期不明の溝もしくは旧河道状の落ち(SX01)を検出した。SD03を主たる調査目的としたII区については、SD03が二股に分岐する可能性とSX01を含め東側微高地に同時期の遺構が存在する可能性を考え、II区(a)として本調査対象とした。即時機械掘削を行ったところ、SD03はくの字形に屈曲し、Tr9南7m地点で削平のためか消滅していることと、東側微高地については、圃場整備や暗渠排水設置による攪乱が激しく、SX01が南北に続く様子がかろうじて確認される状況であることが判明した。また、SD03収束部南3m付近にてピット群が検出され、掘立柱建物が検出される可能性が生じ、掘立柱建物の柱穴ラインとなる東西・南北に幅4mのトレンチを設定し、その全容の把握に努めることとした。その結果、4棟の掘立柱建物が検出され、それ以上に広がらないことを確認し、II区bとして追加本調査に臨んだ。

### (2) 基本層序と全体的な遺構分布状況

以下、本調査には至らなかった地域を含め、西谷遺跡の巨視的な旧地形の復元と遺構の分布状況について概観する。

#### ① 表土～近世洪水砂層

層厚20cm程の現耕作土の下には、圃場整備に伴う盛土層が20～100cm程存在し、部分的に大きく攪乱を受けた箇所も存在する。またTr2・4では、その下に灰色系砂質土の旧耕作土が10～20cm程見



第37図 トレンチ配置状況と遺構配置概念図



られる箇所も存在する。その下には、層厚10～30cmで、灰褐色～淡灰茶色のシルト質細砂～粗砂のラミナを伴う洪水砂層が堆積しており、染付細片を出土している。後述するSR01～03、SX01は基本的にはその下で検出されているが、Tr 8では洪水砂層がSR01の下層と最下層の間に潜り込む状況が、Tr 4ではSR03上に窪みを伴う状況が観察された。また、Ⅱ区の掘立柱建物群と同時期と考えられる西部の鋤溝跡は、Tr 5でこの洪水砂層の下で、ベース面とともにそれに連続するSR03埋没面にも掘り込まれている状況が確認された。したがって、SR01とSR03は堆積状況がよく似ているが、SR03がほぼ埋没を終えた後に、SR01下層が堆積すると考えざるをえない。

## ② 旧河道及び不明落ち

### a. SR01

SR01は、予備調査のTR1で西肩部を、TR2・TR8で東肩部を検出した。中央部に現在使用中の道及び水路が位置しており、最深部の状況は確認できなかったが、幅30m近く、深さ2～3mに及ぶ南西部の開析谷より流れた旧河道と考えられる。本調査では西肩部1m程を掘削するにとどめた。灰橙褐色系砂質土の上層、濃灰色系粘質土の中層、暗灰色系粘質土の下層、暗褐色系砂層と灰黒色系粘質土がラミナをなす最下層と大きく4層に分けることができる。厚さ40cm程の上層からは染付等を出土し、厚さ40cm程の中層からの遺物の出土は確認できなかった。厚さ80cm以上の下層は、小枝や枯葉状の腐食木を多く含む。瓦器を出土したが、前述したように洪水砂層が下層と最下層の間に潜り込む状況が観察され、近世以降の埋没である。厚さ50cm程の最下層は流木をまばらに含むが、遺物の出土は確認できなかった。最下層についても、埋土の色調や含有物はSR02と異なり、Ⅰ区中世掘立柱建物群が存在していた時期以降と考えられる。なお、現在調査区の北西部に存在する池は、このSR01の流路を利用して築造されたものと考えられる。

### b. SR02

SR02は、Ⅰ区中世掘立柱建物群の柱穴の東半部が掘り込まれているベース層を形成している灰緑色系粘質土からなる埋土の旧河道で、トレンチ調査だけにとどめた。Ⅰ区北半部では風化花崗岩からなる黄灰色系砂質土をSR01が掘り込み、予備調査TR1及び本調査南壁トレンチで西肩を確認している状況から、流路の方向はSR01より30度余り東偏するものと考えられる。南壁のSR01西肩直下で深さ1m程を計る。ほぼ完形の土師器杯を出土し、掘立柱建物群の柱穴出土遺物とほぼ同時期の様相を呈している。埋土の状況からSR02は、洪水等で一気に埋没したのではなく、淀み状態で埋没したもの、もしくは人為的埋め立てと考えられ、両者の遺物の時期幅等、詳細な検討が必要であろう。

### c. SR03

Tr 4～6・9で、南東部の開析谷より谷平野東部を北北西方向に流れるSR03が検出された。推定幅20m余り、深さは、上部を削平されたり圃場整備時の攪乱が及んでいて不明な部分もあるが、1～1.5m程と思われる。上層は黄橙～青灰色のラミナを伴う中～粗砂層で、中層は流木を多く含む暗茶～黒灰色粘質土、下層は流木をまばらに含む暗灰～灰色のラミナを伴う粘質シルト～粗砂層である。遺物は確認できなかったが、前述したように、Ⅱ区掘立柱建物群が形成された時期には、SR03はほぼ埋没し鋤溝が掘り込まれている。なお、現在調査区南東部に位置する谷上池・谷下池(別名夫婦池)は、このSR03の流路を利用して築造されたものと考えられる。

#### d. S X01

Tr 9で確認したS X01は、上層に黒灰色及び暗青灰色混砂粘質土の埋土を有し、下層は東半部に暗灰色の流木を含むシルト質細砂層、西半部に明灰色細～粗砂からなる一連のラミナを形成する旧河道状の堆積状況を示す。幅は9 m程、深さは上層が0.6 m程、下層は1 m以上である。本調査時に上層より土釜脚を出土し、埋没時期が中世以降であることを確認したが、攪乱が激しく、詳細な調査は断念した。Tr 4で検出した溝状落ちとS X01上層がつながるものと思われるが、下層については攪乱とグライ化の影響もあって、独立した旧河道として明確に判別できていない。S R03同様、Ⅱ区掘立柱建物群が形成された時期にはほぼ埋没していたものと思われる。

#### e. S X02

S X02は、Tr 4で検出された不明落ち及び盛り上がりである。S R03東に位置し、東部は幅6 m程、厚さ10～20 cm程で、わずかに西に傾斜して堆積する暗褐灰色粘質土層である。その西端部は、断面台形状を呈する幅2.4 m程、厚さ25 cm程の暗灰褐色混粗砂粘質土が被さり、さらにその西端部はS R03上に被さる。トレンチ両壁から推測される方向は、S R03と平行し、一連の堆積層もしくは人為的な畦と考えられるが、Tr 5ではそれにつながる凹凸を示す部位は検出されなかった。弥生土器もしくは土師質土器細片1点を出土したが、時期・性格ともに不明である。

#### f. S X03

S X03は、Tr 8東部で検出された褐暗灰色混粗砂粘質土の溝及び不明落ちである。溝は幅1 m程、深さ30 cm程、落ちは幅8 m以上、厚さ20～30 cm程で、わずかに東に傾斜して堆積する。溝は北東方向で検出され、落ちはその1 m東に平行する。遺物は確認されなかった。方向的にはS R01のオーバーフローした支流とも考えられるが、時期・性格ともに不明である。

#### g. 近世溝

Tr 6で、幅1 m程、深さ20 cm程の北西方向の溝を検出した。染付を出土し、近世以降のものであるが、圃場整備前の条量図には掲載されていない。

### ③ ベース層

ベース層として、東西の山裾部3 m付近までは、床土直下に風化花崗岩からなるよくしまった砂質土ないし粘質土が認められる。中央部は、それを急激に掘り込む形で、花崗岩起源の粗砂粒を主体としながら、細砂～シルトを含む広範囲のラミナを形成する洪水堆積層＝沖積層が認められる。Tr 2の砂層中より弥生土器と思われる摩滅した細片1点を出土しており、極々希薄な包含層である可能性を有する。現地表面より2.5 m程の掘削では、洪積層と考えられる礫

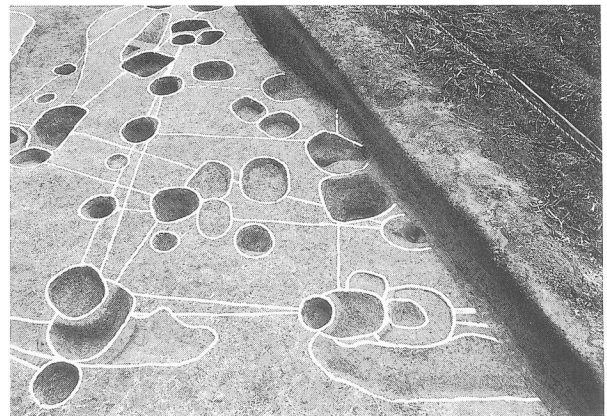
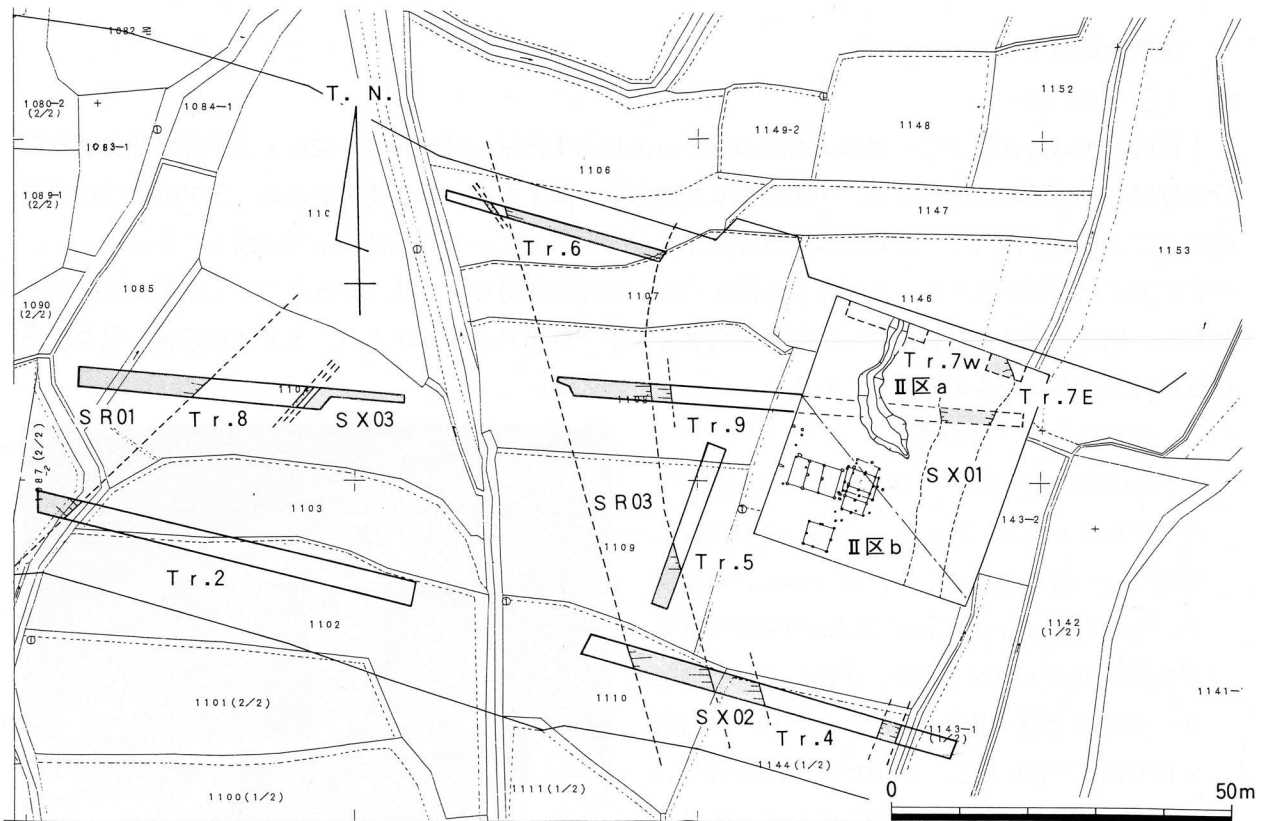


写真20 S B01～05近景及びⅠ区南壁土層(西より)

層は検出できていない。色調は、東半部は上に谷下池が存在し、飽和含水状態となっているためにグライ化現象を生じ、一般に青～緑灰色を呈している。西半部は比較的排水もよく、地下水も循環しているせいであろうか、酸化現象を生じ、一般に黄～褐橙色を呈している。



第38図 圃場整備前丈量図での遺構配置概念図



第39図 周辺地形図での遺構配置概念図



### 3. 本調査結果

#### (1) I区 (第41図)

I区は、西は低丘陵にて、東は南西部の谷から流れ出す埋没河川SR01・02にて谷平野と隔絶される丘陵裾野の小平坦地に位置する、中世の掘立柱建物群・溝を中心とした遺跡である。SR01の最終埋没時期は19世紀前半以降で、SR02は中世段階で埋没を完了している。丘陵裾の緩斜面からSR02上に、中世の薄い包含層が広がる。山裾を巡る溝SD01・02は包含層を切り込んで流れたことが明確に認められたが、掘立柱建物群の柱穴については包含層を若干下げて初めて検出され、SR02埋没後、包含層堆積以前に形成されたものと考えられる。

#### ① SD01・02 (第40図)

SD01はSD02を、SD02は包含層を切って、それぞれ5～6cm/m、2～5cm/mの傾斜で東流する。溝幅及び深さは、残りのよい東端部で、それぞれ1.8mの35cm、2.5mの50cmを計る。調査区以西は不明であるが、山裾に沿って開削された灌漑兼排水用の水路で、SD01は111度、SD02は101度東偏し、SR01に注ぎ込んでいたものと考えられる。大内町に現存する条里地割りが約7度東偏していることから、条里に規制された方向付けの意図が感じ取れる。

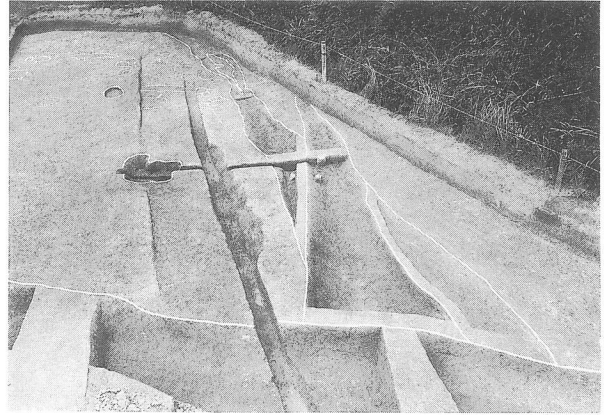
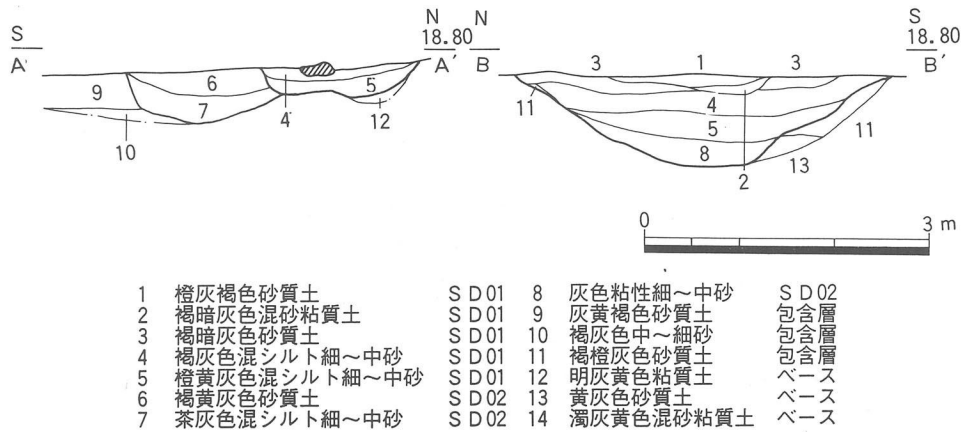
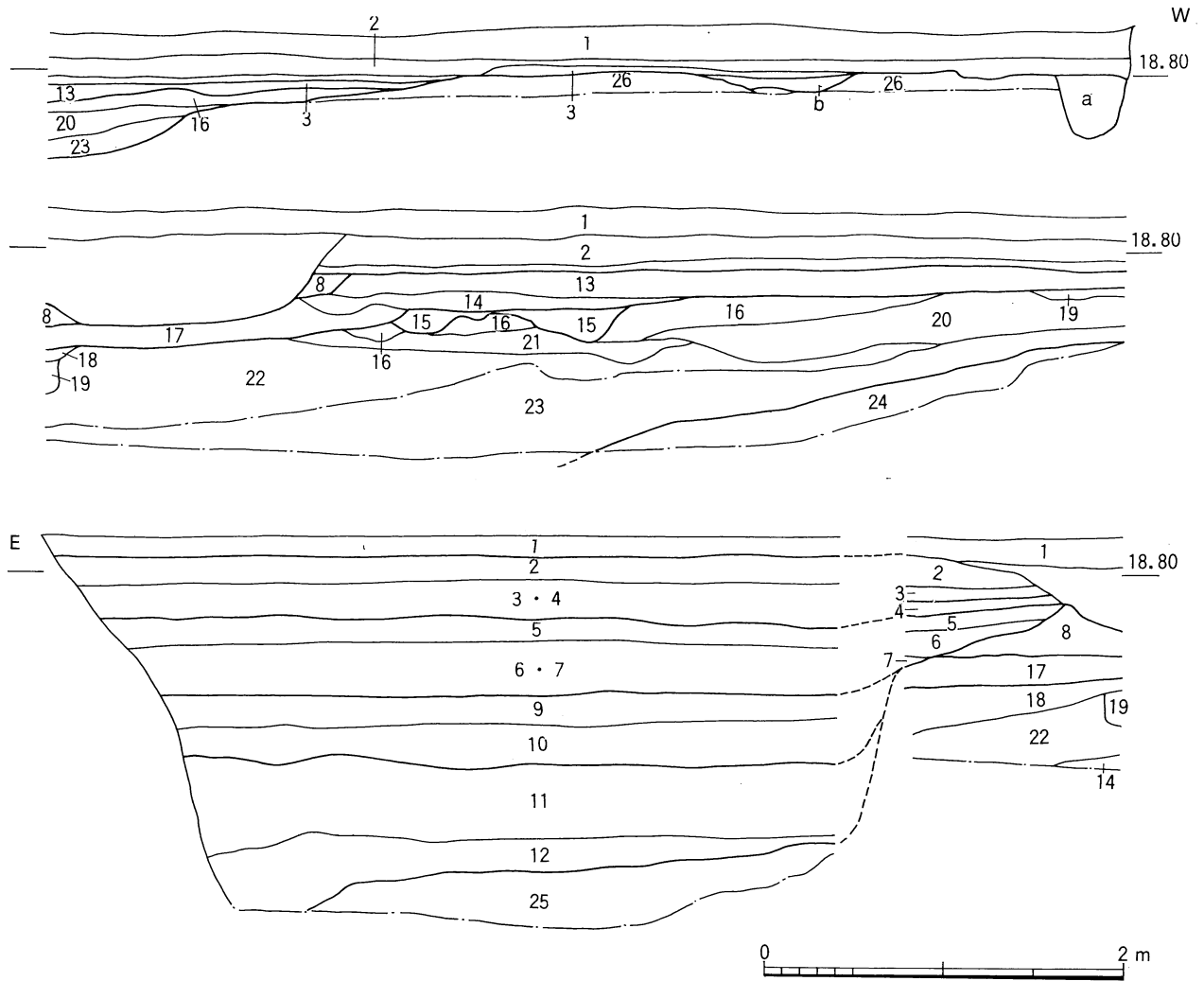


写真21 I区上面遺構完掘状況  
(東より、手前SR01、右SD01・02)

主な遺物としては、SD01からは青磁碗を、SD02からは土鍋もしくは羽釜を出土している。平行叩き文を施した土鍋もしくは羽釜は、県内初出土で、播磨からの搬入品とも考えられる。



第40図 SD01・02土層断面図

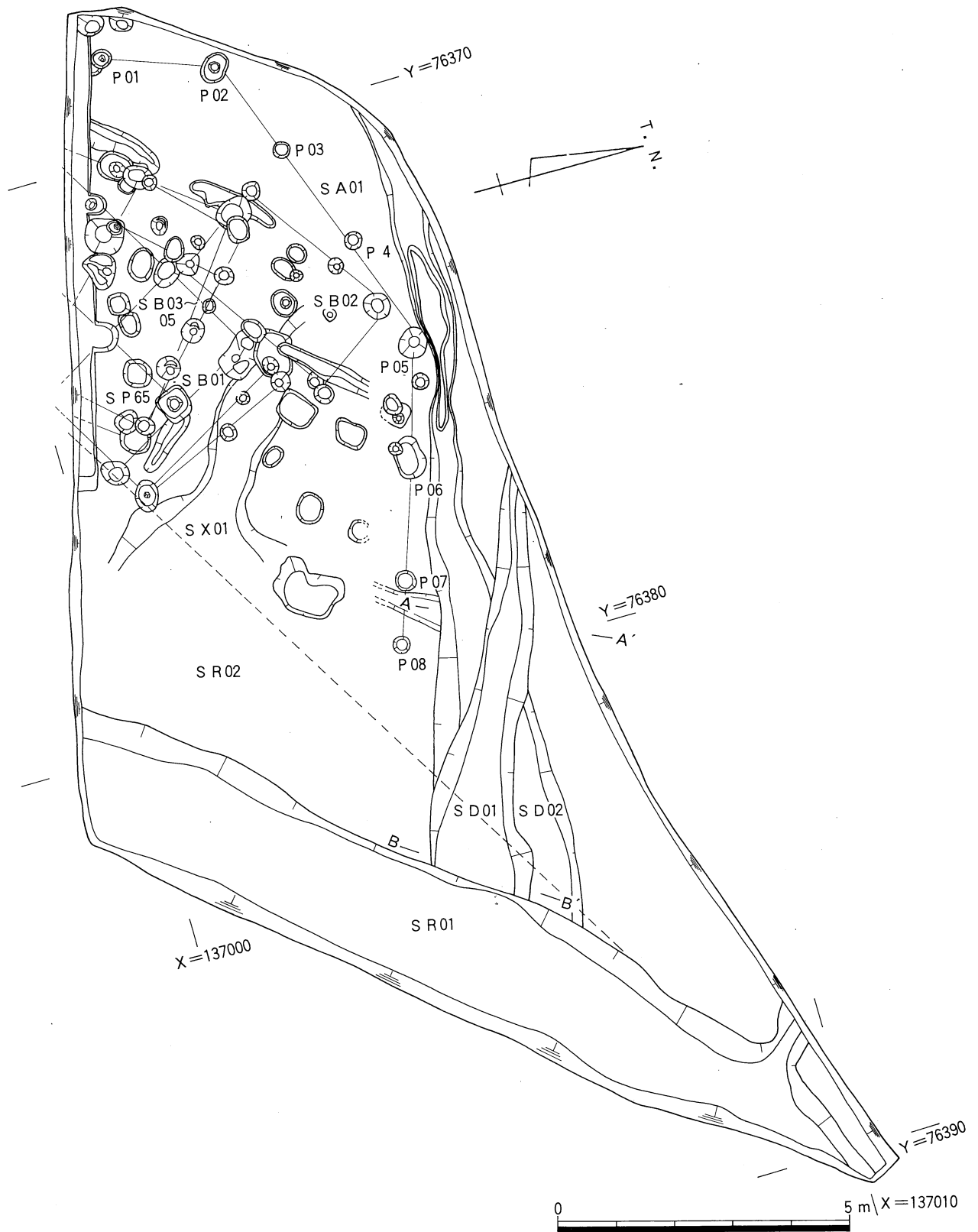


西谷遺跡 I 区南壁土層 10

1 暗緑灰色混砂シルト	現耕作土	15 灰橙褐色混砂粘質土	ピット?
2 明灰橙色混砂粘質土	盛土(整地層)	16 濁褐橙色混砂粘質土	中世整地土
3 灰褐色混砂粘質土	盛土(整地層)	(S B 01~05生活面)	
4 灰褐橙色混砂粘質土	盛土(整地層)	17 青灰~赤橙褐色混砂粘質土	S R 02
5 暗灰緑色混砂粘質土	S R 01上層	18 濁緑灰色混砂粘質土	S R 02
6 濃灰色混砂粘質土	S R 01上層	(完形杯出土)	
7 赤褐色中~粗砂	S R 01上層?	19 緑濃灰色混砂粘質土	P i T ?
8 濁灰黄色混砂粘質土	S R 01上層?	20 茶灰色混シルト細~中砂	S R 02
9 濁灰色砂質土	S R 01中層	21 濁茶橙灰色混砂粘質土	S R 02
10 濃灰色混砂粘質土	S R 01中層	22 灰緑色混砂粘質土	S R 02
(青灰色粗砂ブロック含む)		23 濁暗緑灰色混砂粘質土	S R 02
11 暗灰色混砂粘質土	S R 01下層	24 明緑灰色混砂粘質土	ベース?
(流木多い, 土師質土器出土)		(しまり弱)	
12 灰黒色混砂粘質土	S R 01下層	25 白灰~銀灰色細~中砂	ベース?
13 灰暗褐色細~中砂	包含層	(やや粘性有り)	
(Mn沈着顕著)		26 明灰橙色混砂粘質土	ベース
14 暗褐灰色細~中砂	包含層	a 茶暗青灰色混砂粘質土	ピット
(Mn沈着)		b 明橙灰色混シルト中砂	S B 05雨落ち溝

(S R 01は予備調 T R 1 と合成)

第41図 I 区南壁土層断面図



第42図 I区遺構配置図

② I区掘立柱建物群及び柵列 (第42図)

I区では総数60余のピットが検出され、その配列から5棟の掘立柱建物 (S B01~05) と柵列S A01を復元した。主軸方向より、2時期あることが想定される。掘立柱建物群以前に埋没したS R02の流路が北東方向、掘立柱建物群以後に埋没したS R01の流路が北北東方向であることから、S B01・02が先行し、S B03~05が後出するものと考えられる。ビニール袋大1袋分程の遺物が出土したが、遺物の項で後述する。



写真22 I区下面遺構完掘状況 (東より、中央S B01~05)

a. S B01 (第43図)

S B01は、東西2間×南北2間 (3.20×3.60m) 以上の総柱建物と考えられる。北側に0.6m幅ないし0.6~0.9m幅の庇を伴う。建物は南北棟のものと思われ、主軸 (南北) は真北から58度東偏する。柱間距離は、総柱建物が東西1.60m間隔、南北1.80m間隔で規則性を有しているが、庇部分については規則性は認められない。柱穴の平面形態は、総柱建物については隅丸方形を呈するものが優勢で、庇は円形ないし楕円形を呈している。隅丸方形の柱穴は、大きいもので80×53cm程、深さ43cm程、円形ないし楕円形の柱穴は、大きいもので、54×40cm程、深さ70cm程を計る。ある程度の削平は受けているものの、一般に、溝状包含層落ちのある北側及びS R02埋没後の東側の柱穴が深く、山裾部風化花崗岩のベース面に彫り込まれている西側の柱穴は浅い傾向が見られる。埋土は橙褐灰色系混砂粘質土で、褐濃灰色系混砂粘質土の柱痕部を有するものも存在する。庇P09は、直径11cm、長さ50cm程の柱根木質が遺存していた。材質の同定・鑑定については、未実施である。

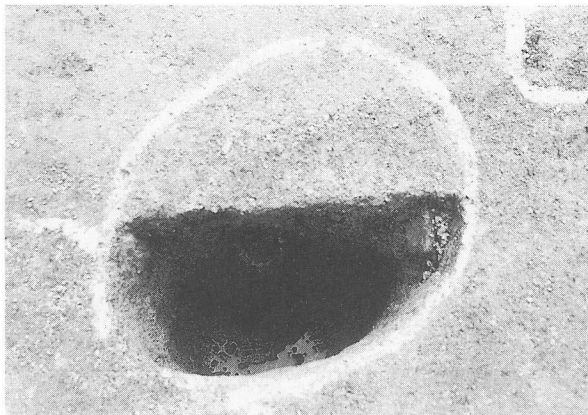
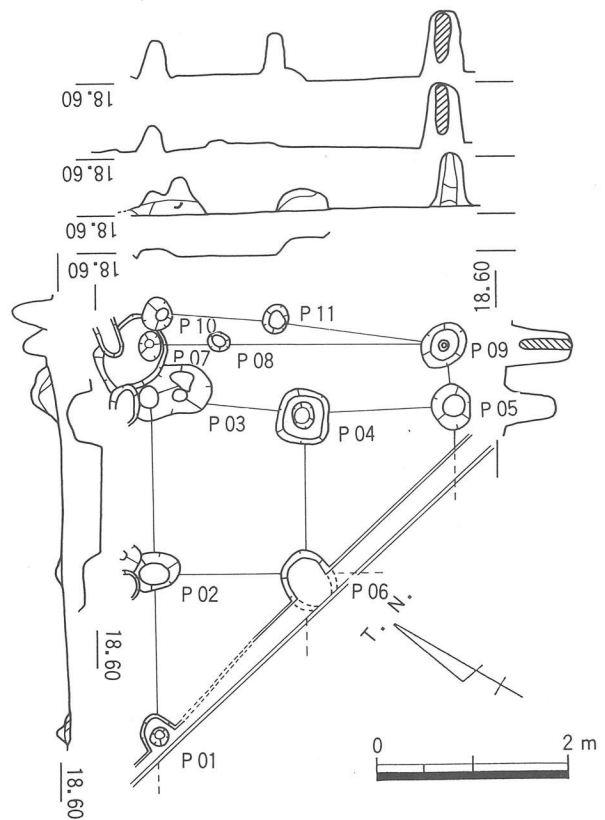


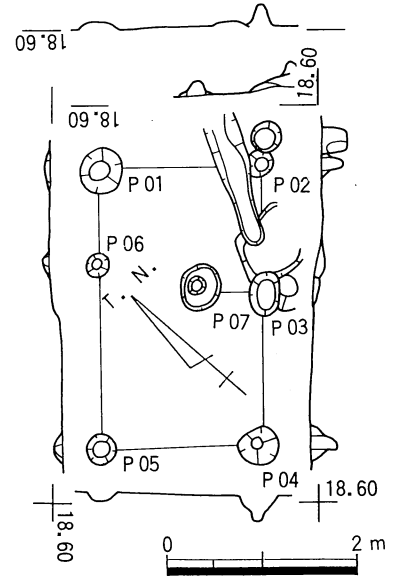
写真23 S B01-P09柱根検出状況 (北より)



第43図 S B01平・断面図

b. S B02 (第44図)

S B02は、東西1間×南北2間(1.70×3.00m)の建物である。建物は南北棟で、主軸は真北から58度東偏し、S B01に30cm未満で平行する。P03・04がS B01のP03・02を切り、S B01建設後にS B01に付属する物置的な機能を有する施設として建てられたものと考えられる。桁の中間柱は、東側は北より1.4-1.6mとほぼ中央に位置しているが、西側については1.0m-2.0mと北に大きく偏って配されている。広い間口を持つ南側部分が出入り口として利用されたものと考えられる。また、P07については、東桁中間柱のP03の0.7m横に位置しており、衝立あるいは棚柱として配された可能性も考えられる。柱穴の平面形態は、円形ないし楕円形を呈し、直径40cm程、深さ28cm程を計る。S B01同様、一般に、東側の柱穴が深く、西側の柱穴は浅い傾向が見られる。埋土は橙茶灰色系混砂粘質土で、黄／褐濃灰色ないし淡茶灰色系混砂粘質土の柱痕部を有する。

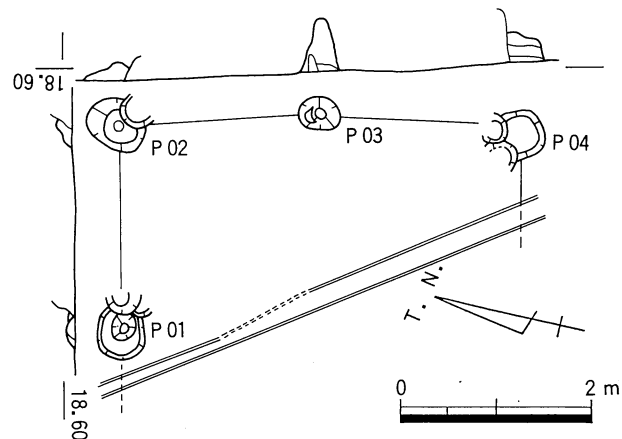


第44図 S B02平・断面図

c. S B03 (第45図)

S B03~05は、いくつか柱穴を共有して、ほぼ同位置に復元した建物である。切り合い関係と柱穴配置から3棟を復元したが、S B04・05は統合される可能性も残る。前述したように、主軸の方向がS R01と平行し、さらに建物北部の溝状包含層落ちに平行することから、S B01・02に後出する建物と考えられる。

S B03は、S B04・05に切られる東西2間×南北1間(4.30×2.15m)以上の同位置では最初に建てられた建物である。建物は東西棟のものと思われ、主軸(東西)は真北から128度東偏する。柱間距離は、北列・西列ともに2.15m間隔で規則性を有している。柱穴の平面形態は、隅丸方形ないし楕円形を呈し、隅丸方形の柱穴は60×50cm程、深さ8~30cm程、楕円形の柱穴は44×34cm程、深さ57cm程を計る。北側及び東側の柱穴が深く、西側の柱穴が浅い傾向はS B01と共通する。埋土は橙茶灰色系混砂粘質土で、P01は浅いが黄灰茶色混砂粘質土の柱痕部を有する。



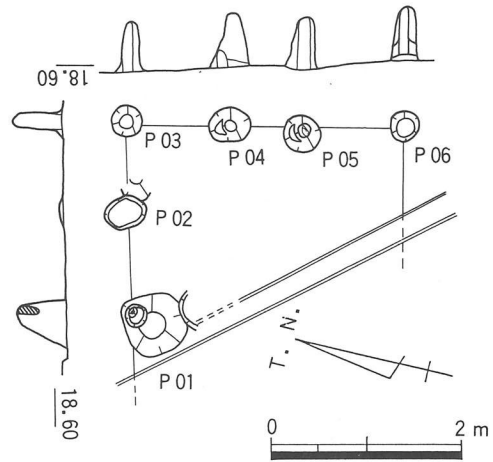
第45図 S B03平・断面図

d. S B04 (第46図)

S B04は、深くて柱痕部のある規則性を持って配列された柱穴を選び、東西3間×南北2間(2.95×2.00m)以上として復元した建物である。S B03のP03をS B04のP04として継続利用する他、S B05と多くの柱穴を共有し、統合される可能性も残る。建物は南北棟のものと思われ、主軸(南北)は真北から44度東偏する。柱間距離は、北列は西より1.10-0.75-1.10mと対称的に配置されるのに対し、西列は北より0.95-1.05mとやや規則性に欠ける。北列柱穴の平面形態は円形を呈し、直径は端部が30cm程、中間部が38cm程で、深さはいずれも55cm前後である。西列柱穴の平面形態は隅丸方形を呈し、規模は40×34cm, 62×62cm程、深さも4cm, 52cm程と規格性に欠けている。なお、P05はI区の柱穴の中では唯一根石を伴う。また、P01は直径10cm, 長さ27cm程の柱根木質が遺存していた。材質の同定・鑑定については、未実施である。埋土は橙茶灰色系混砂粘質土で、茶灰色系混砂粘質土の柱痕部を有する。

e. S B05 (第47図)

S B05は、幅30~44cm, 長さ1.25~1.60m程のほぼ直交する3本の雨落ち溝と思われる窪みのすぐ内側で、東西3間×南北1間(3.90×1.70m)以上として復元した建物である。雨落ち溝は柱穴に切られているように図示されているが、柱穴プランを確定するためベース層に泥水等が浸透して変色した部分まで掘り下げた結果で、本来は柱穴上部に形成されたものであることが南壁土層断面からも明らかである。柱列と溝との間隔が非常に狭いのが気かりではあるが、軒下の短い寄棟ないし入母屋構造であったものと思われる。S B04のP01・05・06をS B05のP06・04・05として継続利用する。その際、P06はP01-06列の大黒柱的機能を持つものとして残るが、老朽化



第46図 S B04平・断面図

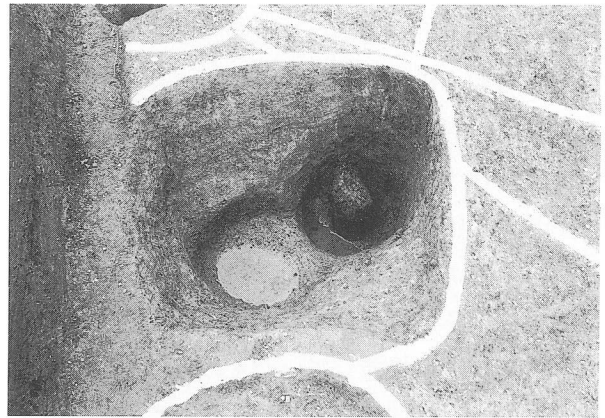
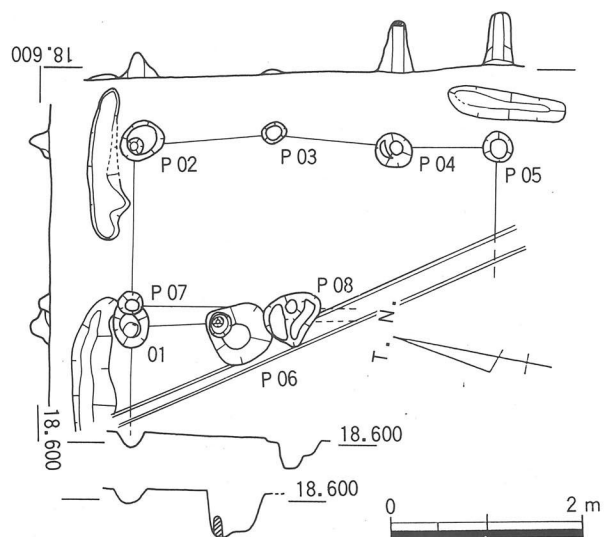


写真24 S B04-P01及びS B05-P06  
柱根検出状況(東より)



第47図 S B05平・断面図